

の講義をして居たが忘れたか。」

「ねエ朝田様！その時、神崎様が巻煙草の灰を掌にのせて、此灰が貴女には妙と見ませんか  
と聞か、私は何でもないといふと、だから貴女は駄目だ、凡そ宇宙の物、森羅萬象、妙な  
らざるはなく、石も木も此灰とても面白からざるはなし、それを左様思はないのは科學の神  
に歸依しないのだからだ、とか何とか、難事しい事をへらく、何時までも言ふんですもの。  
私、眠くなつて了つたわ、だからアーメンと言つたら、貴下怒つちやつたぢやありません  
か。ねエ朝田様。」

「さうですとも、だから其石は頗る妙、大に面白しと言ふんですねエ。」

「神崎様、昨夕の敵打ちよ！」

「たしかに打れました。けれど春子様、朝田は何時も静慮で酒も何にも呑まないで、少しも  
理屈を申しませんからお互に幸福ですよ。」

「否、お二人とも随分理屈ばかり言ふわ。毎晩々々、酔ては討論會を初めますわ！」

甲乙は噴飯して、申し合したやうに湯衣に着かへて浴場へ逃げだして了つた。

少女は神崎の捨てた石を拾つて、百日紅の樹に寄りかゝつて、西の山の端に沈む夕日を眺め  
ながら小聲で唱歌をうたつて居る。

又 少女の室では父と思しき品格よき四十三の紳士が、此宿の若主人を相手に囲碁に夢  
中で、石事件の騒などは一切知らないでバチ／＼やつて御座る。そして神崎、朝田の二人が  
浴室へ行くと間もなく十八九の愛嬌のある娘が園碁の室に来て、

「家兄さん、小田原の姉様が参りました。」と淑かに通ずる。これを聞いて若主人は顔を上げ  
て、やゝ不安の色で。

「よろしい、今ゆく。」

「急用なら中止しませう」と紳士は一寸手を休める。

「何に關ひません、急用といふ程の事じゃアないんです。」と若主人は直ぐ盤を見つめて、石  
を下しつゝ、

「今の妹の姉にお正といふのが居たのを御存じでしょう。」

「そうでした、覚えて居ます。可愛らしい佳い娘さんでした。」と紳士も打ちながら答へる。

「そのお正が此春國府津へ嫁いたのです。」

「それはお目出度い。」

「ところが餘りお目出度くないんでしてな。」

「それは又？」

「どういふものか折合が善くありませんで。」

「それは善くない。」

「それで今日来たのも、又何か持上つたのでしよう。」

「それでは早く行く方が可い。………」

「なに、どうせ二晩三晩は宿泊のですから急がないでも可いのです。」と平氣で盤に向つて居るので、紳士も其氣になり何時かお正の問題は忘れて了つて居る。

浴室では神崎、朝田の二人が、今夜の討論會は大友が加はるので一倍、春子さんを驚かすだらうと語り合つて楽しんで居た。

(二)

箱根細工の店では大友が種々の談話の末、漸とお正の事に及んで

「それぢやア此二月に嫁入したのだね、随分遅い方だね。」

「まア遅いはうでしようね。貴下は何時ごろお正さんを御存知で御座います。」

「左様サ、お正さんが二十位の時だらう、四年前の事だ、だからお正さんは二十四の春嫁いたといふものだ。」

「全く左様で御座います。」と女主人は言つて、急に聲をひそめて、「處が可憐さうに餘り面白

く行かないとか大ぶん紛糾があるようで御座います。お正さんは二十四でも未だ若い盛で御座いますが、旦那は五十幾歳とかで、二度目だそうで御座いますから無理も御座いませぬよ。」

大友は心に頗る驚いたが別に顔色も變ず、「それは氣の毒だ」と言ひさま直ぐ起ち上つて、「大きにお邪魔をした」とばかり、店を出た。

大友の心には此二三年前來、何卒此世に於て今一度、お正さんに會いたいものだといふ一念が蟠つて居たのである、此女のことを思ふと、悲しい、懐しい情感到に堪え得ないことがある。そして此情感到に耽る時は人間の淺間しサから我知らず脱れ出づるやうな心持になる。あたかも野邊にさすらひて秋の月のさやかに照るをしみくくと眺め入る心持と或は似通へるか。さりとして矢も楯もたまらづお正の許に飛で行くやうな激越の情は起らないのであつた。

たい會ひたい。此世で今一度會ひたい。縁あらば、せめて一度此世で會ひたい。とのみ大友は思ひつづけて居た。何ぞ其心根の哀しきや。會ひ度くば幾度にも逢る、又た逢へる筈の情縁あらば如斯な哀しい情緒は起らぬものである。別れたる、離れたる親子、兄弟、夫婦朋友、戀人の仲間の、逢たき情とは全然で異つて居る、縁あらば此世で今一度會ひたい」と願の深ひ哀は常に大友の心に潜んで居たのである。

或夜大友は二三の友と會食して酒のやゝ廻つた時、斯いふ事を言つたことがある。僕の知つて居る女でお正さんといふのがあるが、容貌は十人並で、たい愛嬌のある女といふに過ぎないけれど、如何にも柔和な、どちらかと言へば今少はハキ／＼してもと思はるゝ程の性分、何處までも正直な、同情の深さうな娘である。肉づきまでがふつ／＼して、温かさうに思はれたが、若し、僕に女房を世話して呉れる者があるなら彼様の欲いものだ」

それならば大友はお正さんに戀ひ焦がれて居たかといふと、全然、左様でない。たい大友が其時、一寸と左様思つた丈けである。

四年前、やはり秋の初であつた。大友が此温泉場に来て大東館に宿つたのは。

避暑の客が大方歸つたので居残の者は我儘方題、女中の手もすいたので或夕、大友は宿の娘のお正を占領して飲んで居たが、初は戯談のほれたはれた問題が、次第に本物になつて、大友は遂に其時から三年前の失戀談をはじめた。女中なら「御馳走様」位でお止になるところが、お正は本氣で聞いて居る、大友は無論眞剣に話して居る。

「それほどまでに二人が艱難辛苦してやツと結婚して、一緒になつたかと思ふと間もなく、ホカントと僕を捨て、逃げ出してしまつたのです」

「まア痛いこと！それでは貴下は如何なさいました。」とお正の眼は最早潤んで居る。

「女に捨てられる男は意地なしだとの、今では、人の噂も理會りませんが、其時の僕は左まで世にすいて居なかつたのです。たい夢中です、身も世もあらぬ悲嘆を堪え忍びながら如何にもして前の通りに爲たいと、恥も外聞もかまはず、出来るだけのことをしたものです。」

「それで駄目なんですか。」

「無論です。」

「まア、とお正は眼に涙は一ぱい含ませて居る。

「僕が夢中になるだけ、先方は益々冷て了う。終ひには僕を見るもイヤだといふ風になつたのです。」そして大友は種々と詳細い談話をして、自分が如何ほど其女から侮辱せられたかを語つた。そして彼自身も今更想ひ起して感慨に堪えぬ様であつた。

「さぞ憎らしかつたでしょうねエ、」

「否、憎らしいと其時思ふことが出来るなら左まで苦しくは無いのです。たい悲嘆かつたのです。」

お正の兩頬には如何しか涙が静かに流れて居る。

「今は如何な思つてお居てゝす」とお正は聲をふるはして聞いた。

「今ですか、今でも憎いとは思つて居ません。けれどもね、お正さん僕が若し彼様な不幸に會なかつたら、今の僕では無かつたらうと思ふと、残念で堪らないのです。今日が日まで三年ばかりで大事の月日が、殆ど煙のやうに過つて了りました。僕の心は壊れて了つたのですからねエ」と大友は眼を睨みつけた。お正ははんげちを眼にあて、頭を垂れて了つた。

「まあ可いサ、酒でも飲みましょう」と大友は酌を促がして、黙つて飲で居ると、隣室に居る川村といふ富豪の子息が、酔た勢で、散歩に出かけやうと誘ふので、大友はお正を連れ、川村は女中三人ばかりを引率して宿を出た。川村の組は勝手にふざけ散らして先へ行く、大友とお正は相並で静かに歩む、夜は冷々として既に腐寒く憂ゆる程の季節あえ、溪流に沿ふ町はひっそりとして客らしき者の影さへ見へで、月は沓えに沓えて岩に激する流は雪のやうである。

大友とお正は何時か寄添ふて歩みながらも言葉一ツ交さないで居たが、川村の連中が遠く離れて森の彼方で聲がする頃になると、

「眞實に貴下はお可愛さうですねエ」と、突然お正は頭を垂れたまゝ言つた。

「お正さん、お正さん？」

「ハイ」とお正は顔を上げた。双眼涙を含める蒼ざめた顔を月はまともに照らす。

「僕はね、若し彼女がお正さんのやうに柔和い人であつたら、こんな不幸な男にはならなかつたと思ひます。」

「そんな事は、」とお正はうつむいた、そして二人は人家から離れた、磯の多い凸凹道を、静かに歩んで居る。

「否、僕は眞實に左様思ひます、何故彼女がお正さんと同じ人で無かつたかと思ひます。」

お正は、そつと大友の顔を見上げた。大友は月影に霞む流の末を見つめて居た。

それから二人は暫時く無言で歩いて居ると先へ行つた川村の連中が、がや／＼と騒わきながら歸つて來たので、一緒に連れ立つて宿に歸へつた。其後三四日大友は滯留して居たけれどもお正には最早、彼の事に就ては一言も言はず、お給仕ごとに楽しく四方山の話をして、大友は歸京したのである。

爾來、四年、大友の戀の傷は癒え、戀人の姿は彼の心から消え去せて了つたけれども、お正には如何かして今一度、縁あらば會ひたいものだと思つて居たのである。

そして來て見ると、兼て期したる事とは言へ、さてお正は既に居ないので、大に失望した上に、お正の身の上の不幸を箱根細工の店で聞かされたので、不快に堪えて、流を沿つて溪の奥まで一人で散歩して見たが少しも面白くない、氣は塞ぐ一方であるから、宿に歸つて、

少し夕飯には時刻が早い、酒を命じた。

(三)

大友は、「用があるなら呼ぶから。」と女中をしりぞけて獨酌で種々の事を考へながら淋びしく飲んで居ると宿の娘が「これをお客様が」と差出したのは封紙のない手紙である、大友は不審に思ひ、開き見ると、

前略我等兩人當所に於て君を待つこと久しとは申兼候へ共、本日御投宿と聞いて愉快に堪えず、女中に命じて臍部を弊室に御運搬の上、大に語り度く願候

神崎

朝田

大友様

とあるので、驚いた。何時ごろから来て居るのだと聞くと、娘は一週間ばかり前からと云ふ直ぐ次の返事を書いて持たしてやつた。

お手紙を見て驚喜仕候、兩君の室は憐室の客を驚す恐あり、小生の室は御覽の如く獨立の離島に候間、徹宵快談するもさまたげず、是非此方へ御出向き下され度待上候すると二人が、やつて来た。

「君は何處を遍歴つて此處へ来た？」と朝田が座に着くや着かぬに聞く、

「イヤ、何處も遍歴らない、東京から直ぐに來た。」

「そこで此夏は？」

「東京に居た。」

「何をして？」

「遊んで。」

「そいつは下さらなかつたな」

「全くサ、そして君等は如何だ。」

「伊豆の温泉めぐりを爲た。」

「面白い事が有つたか。」

「随分有つた。然し同伴者が同伴者だからね。」と神崎の方を向く。神崎はたゞ「フ、ン」と笑つたばかり、盃をあげて、ちよつと中の模様を見て、ぐびり飲んだ。朝田もお構なく、

「現に今日も、斯うだ、僕が縁とは何ぞやとの間に何と答へたものだらうと聞くと、先生、

この圓と心得て」疊の上に指先で○を書き、

「圓の定義を平氣な顔で暗誦したものだ、君、斯ういふ先生と約一ヶ月半も僕は臍を並て酒

を呑だのだから堪らない。」

「それはお互サ」と神崎少しも驚かない。

「然し相かはらず議論は激しかつたらう」と大友はにこ／＼して問ふた。

「やつたとも」と朝田、

「朝田の愚論は僕も少々聞き飽きた」と神崎の一言に朝田は「フ、ン」と笑つたばかり。これだから二人が喧嘩を爲さないで一ヶ月以上も旅行が出来たのだと大友は思つた。

三人とも愉快に談じ酒も相當に利いて十一時に及ぶと、朝田、神崎は自室に引上げた、大友は頭を冷す積で外に出た。月は中天に昇つて居る。恰度前年お正と共に散歩した晩と同じである。然し前年の場所へ行くは却つて思出の種と避けて溪の上へのぼりながら、途々「縁」に就て朝田が説いた處を考へた「縁」は實に「哀」であると泌み／＼感じた。

そして構造の大きな農家らしき家の前に來ると庭先で「左様なら」と挨拶して此方へ來る女がある、其聲が如何にもお正に似て居るやうに思はれ、つい立どまつて居ると、往來へ出て月の光を正面に向けた顔は確かにお正である。

「お正さん」大友は思はず呼んだ。

「大友さんでしょう」と意外にもお正は平氣で傍へ來たので、

「貴女は僕が來て居るの知つて居たのですか」と驚いて問ふた。

「も少し上の方へのぼりながらお話しませうか。」とお正は小聲にて言ふ。

「貴女さへかまはなければ。」

「私はちつとも、かまひませんの。」

それではと前年の如く寄添ふて、溪をのぼる。

「眞實に妙な御縁なのですよ、私は今日、身の上に就て兄に相談があるので、突然に参りますと、妹が小聲で大友さんが來宿するといふのでせう、………」

「それちやア貴女は僕より一汽車後で來たのだ。」

「さうなの。それで今夜はごたく／＼して居るから明日お目にかゝる積で居ましたの。」

さて大友はお正に會つたけれど、そして忘れ得ぬ前年の夜と全然く同じな景色に包まれて同じやうに寄添ふて歩るきながらも、別に言ふべき事がない。却てお正は種々の事を話しかける。

「貴下いつかの晩も此様でしたね。」

「貴下彼晩のことを憶へて居らつしやるが？」

「憶へて居ますとも。」

「私はね、何にもかも全然憶へて居て、貴下の被仰つた事も皆な覚えて居ますの。」  
 「僕もさうです。そして今一度貴女に會ひたいとばかり思つて居ました。今度も實は其積で來たのです。無論何家へ嫁いて居て會へる筈は無らうとは思ひましたが、それでも若しかと思ひましてね……………」

「私も今一度で可いから是非お目にかゝりたひと思ひついでには、彼晩の事を思ひ出して何度泣いたか知れません……………」  
 「ほんとにお嫁になど行かないで兄さんや姉さんを手傳つた方が如何なにか可かつたか今では眞實に後悔して居ますのよ。」

大友は初めてお正が自分を戀ひして居たのを知つた、そして自分がお正に會ひたひと思ふのと、お正が自分に會いたひと願ふのとは意味が違ふと感した。自分はお正の戀人であるがお正は自分の戀人でない、たゞ自分の戀に深い同情を寄せて泣いて呉れた柔しさを戀ひしたのだ。そして自分は戀を戀する人に過ぎないと知つた。實に大友はお正の戀を知ると同時に自分のお正に對する情の意味を初めて自覺したのである。

暫時無言で二人は歩いて居たが、大友は斯く感すると、言ひ難き哀情が胸を衝いて來る。  
 「然しね、お正さん、貴女も一旦嫁いだからには感はないで一生を送つた方が可しいと僕は思ひます。凡て女の感からいふんなら混雜や悲嘆が出て來るものです。現に僕の手でも彼女が

感ふたからでせう……………」

お正はうつ向いたまふ無言。

「それで今夜は運よくお互に會ふことが出來ましたが、最早二度とは會へませんから言ひます、貴女も身體を大切にしていれば幾久しく無事でお暮になるやうに……………」

お正は袖を眼に當て、

「何故會へないのでせうか。」

「會へないものと思つた方が可いだらうと思ひます。」

「それでは貴下は最早會ひたいとは思つては下さらないのですか。」

「決して其様ことはありません。僕はこれまでも彼女に會ひたいなど夢にも思はなくならずしたが、貴女には會ひたいと思つて居ましたから……………」

「それではお目にかゝる事が出来る縁を待ちませうね。」

「ほんとに、さうです。貴女も今言つたやうに、くよくよ爲ないで、身體を大切にお暮しなさい。」

「難有う御座います。」

夜の更くるを恐れて二人は後へ返し、溪流に渡せる小橋の袂まで歸つて來ると橋の向から

男女の連が来る。そして橋の中程ですれちがった。男は三五六の若紳士、女は髪型の二十二三としか見えざる若づくり、大友は一目見て非常に驚いた。足早に橋を渡つて、

「お正さんく。彼れです。彼の女です！」

「まア、彼の人ですか！」とお正も吃驚して見送る。

「如何して又、こんな處で會つたらう。彼女も必定僕と氣が着いたに違ひない。お正さん僕は明日朝出發しますよ。」

「まア如何して？」

「若し彼女が大東館にでも宿泊つて居たら、僕と白晝出會はすかも知れない、僕は見るのも嫌です。往來で會ふかも知れませんが如斯な狭い所ですから。」

「會つても知ん顔して居れば可いぢやア御座いませんか。」

「不愉快です。殊に今度貴女に會つた場合、猶ほ不快です。」

翌朝早大友は大東館を立つた。大友ばかりでなく神崎も朝田も一緒である。見送り人の中にはお正も春子さんも居た。

(完)

### 非凡人

(ツルゲーチフ、翻案)

小綺麗な一室に四五人の青年が集まつて居る、年輩は皆二十前後のものばかり。

冬の夜の面白い饒舌もこれから初るといふ光景、飲む酒は心地よく廻はり、食つたものは腹具合よくおさまり、卓の上にはキュラソーの一個が愛嬌に置いてあるが手を出すものがない。

取留のない話に稍々暫く時を移して居たが、話柄は何時しか非凡人といふ問題に決定して、如何なれば彼等は常人と異なるか、これが議論の種になつた。色々の説も出たが要するに非凡人の非凡人たる點は彼の才能の傑出せるにありとの説が尤も盛んで、古今の例まで引き大聲で騒ぎたてた。

一人、體軀の小さい、蒼白い男が、先刻から黙つて衆の議論を聴き茶を啜り煙草をふかして居たが突然口を入れて次の如く我々(自分も此仲間の一人であつた)に話した。

「諸君！可い加減にし給へ、議論なんか益にたゝない。一方が右といへば必定一方が左と云ふものだ、そして勝手な理屈をつけるから終極がない。又今夜に限つた事はない、議論が戦はしたいなら何時でも出来るじやないか、喧騒くて仕方がない。」



「言つて微笑して、シガラの灰を落した。我々は黙つて了つた。  
 「可からう、然し如何するんだ、これから。花でも引くかね、それともお別にして家へ歸つて寝るかね？」と一人が言つた。

「花も可しい、寝るのも結構、然し、これざりで家に歸くのも早すぎる。で、諸君は僕の言つたことがよく解らないのだ。聞き給へ、議論は無益だが事實は面白い、僕は諸君が自分で知つて居る非凡人を説明して貰ひたいのだ。尤も弱い事實は尤も強い議論よりも意味が深いよ。」

我々は首を捻つた。

「これは異だ、僕は僕より以外の非凡人は別にないと思ふが、僕のことなら諸君先刻御承知ぢやし困つたな、併し御望とあらば話しても可いが……」と一人の男が言つた。

「御免、君の傳記なら澤山だ！」と一人が言つて、更に小柄の男に向ひ、「君から初め給へ、君が僕等の議論を止さしたのだから、君先づ其實例を示すのが眞實だ。然し可いかね、君の話が面白くなかつたら、遠慮なく僕等も君を止めるから。」

「お望とあらば」と小柄の男が答へた。  
 我々は彼の傍ににじり寄つた、彼は我々を見廻はして、ちよつと柱の時計を見て、そして

次の如く話した。

「十年前僕は京都に留學して居たことがある。僕の親父は九州で可なり大きな地主で昔は郷士、随分眞面目臭つた厳格な人物であつたが、何と思つたか僕を亞米利加人の宣教師の家に托して了つた。そこで月々五十圓ほど親父が宣教師に送り、宣教師は僕を其家に同居させて英語を教へ、別して品行を監督するのが其役、一見頗る温和な、而も威あつて犯すべからざる人體で、僕は最初は大に畏敬して居つた。處が或日のこと、僕は大阪の叔父の家に行つて來る積りで宣教師の宅を出たが、運悪く一汽車乗後れたので明日のことにしやうと、其儘宅に引還へした。すると僕は喫驚して了つた、宣教師先生二人の同國人と差向ひで麥酒やウイスキーをがぶつて居る最中。空嚔が卓の上に倒れて居るやら、洋盃に充満い酒が注いであるやら、とんでもない光景であつた、僕を見ると宣教師は直然よろめき起つて兩手を振つて、僕を其名譽ある同國人に紹介した。二人は争つて僕に盃を差した。この光景は僕の將來に少なからぬ結果を來たすべく僕の前途に一場の放逸なる花やかなる幕を開いて見せた。其晩から僕は最早少しも我監督者を畏敬しない、監督者も其監督顔を僕の前に作ることが出來ない。其代り細君は僕を舐るやうに可愛がつた、一口に言へば僕に惚れたのサ、年齢も未だ若かつた……」

「要領を言ひ給へ、要領を！ 君ののろけなら餘り聞きたくないよ」と我々は喚いた。  
 「決して然じやない。僕は唯の男サ、平凡な野郎サ。黙つて聞き給へ、兎も角僕は其後といふものは學問に餘り身を入れなくなつた、従つて遊仲間が澤山出来た、遊仲間と言つても悪い意味に取られては困る、トランプを引いたり、端艇を琵琶湖に漕いだり、随分亂暴な腕白仲間のことだ。其一人に望月小次郎といふのが有つて、其頃十六、僕よりか二歳若い、温順しい、色の白い、何處かに女のやうな處のある可愛い少年であつたが、僕に非常に親しんで能く僕を訪ねて來た。しかし僕の方では別に好きでもなく又嫌でもなく、先づ無頓着に交際して居た……此處で一寸言つて置くが僕は京都に叔父が一人居て其外には親族といふ程のものを持つて居ない、其叔父も僕に金の無心を言ひに來るだけで別に往來を爲ないし、僕は何處へも交際を求めないし、殊に婦人の知人を避けて居た。處が、僕は親父から月々可り澤山の金を送つて貰つて居たから、自然僕の周圍に青年が集る、要之僕の懷中で融通をつける連中であつた。さうする中に僕も新體詩の十ばかりも作つて面白ろ可笑しく、長閑な月日を送つて居ると、青年には有勝な、變な心持になつて來た、僕はこれを人性の醜態とでも言うか、或物が欲しい、或物を得んと悶く、或物を夢む、そして何を夢みて居るのか判然しない。

何を欲しがつて居たのか漸と解つた、僕は寂寥を感じて居たのである。所謂生きた人間の仲間入を願つて居たのである、「人生」といふ言葉が僕の胸の底で反響を起して居る、僕は耳を聳て、其響を聞いた……君、原田君、煙草を一本呉れ給へ。」  
 煙草に火を點て小柄の男は更に話を續けた。

「或朝、望月小次郎が大意で、呼吸をはづまして僕の處へやつて來た。

「オイ君、一大驚報を齎したぞ、知まい、安藤權三君が着いたぞ。」

「安藤權三？、元來何者だ、安藤君といふのは？」

「君未だ安藤君を知らんのか、安藤權三君を？直ぐ往かう、來給へ、昨夜歸つて來たばかりだ。」

「然し如何な男だ。」

「豪い男サ、非凡な人物サ、僕と往つて見れば解る！」

「何だつて？、非凡の人物？、僕は止さう、君獨り往き給へ、年中怪しげな微笑を口邊に浮べて居る平凡詩人だらう！君の非凡な人物といふのは相場が知れてる。」

「飛でもないこと！ 安藤は其な手合じや全く無い！」

其處で僕は安藤こそ僕を訪へ、僕が安藤を訪ねる理由はないと力氣で見たが、終に望月の

言葉に従ふて外へ出た。京都は場末の、最も汚らしい家ばかり並んで居る狭い路地へ入ると肥満かへつた山神が襦袢を干して居る……子供等が喧嘩をやつて居る……」

「叙景は抜きにして叙事だけに願ひたいものだ、進め！ 駆足！」と我々は其實何時の間にか談話に釣込まれて喚いた。

「宜しい、御尤も！ 一軒の下宿屋、といふよりか寧ろ木賃宿とでも言はれさうな家の一室が則ち安藤の住宅であつた、貧乏書生の生活の標本とは實にこれのことだ、多く言葉を費やす必要もない。破障子の前に座つて安藤は煙草をふかして居た。望月には親しげに言葉を交へて僕には叮嚀に挨拶をした。一見、僕は思はず敬重の念を起した。望月の言つたことは確で安藤は確に凡物でない。どつちかと言へば脊は高い方、の瘦形の、端麗な、如何にも風采の好い人物で、其顔……彼の顔の説明は僕も頗る困る、鼻とか眼とか口とか一々評するなら別に難事くもないが然し何が其人物の特色を發揮して居るか、其顔の粹は何者であるか。」「パイロンの所謂「顔の音楽」なる者かね。」と我黨の詩人が口を入れて、眼鏡越しに小柄の男の顔を見た。

「全く然だ……其處で安藤の顔の特色を僕が出来るだけ簡単に言ふなら、其「或物」即ち他を動かす或物は彼の平易なる、氣にも留めない愛嬌と、少も畏縮する處のない伸々とした

容貌と、人を魔する微笑との中に躍動して居るとでも言うか、其他に評しやうが無いのである。

安藤の履歴の大略を言ふと、彼は夙く両親に別れて殆ど其顔も知らず、貧乏な親族に引取られて十五の年齢まで其處の世話になつたが縁の手傳をさせられ具に難難を嘗めて、育成つたものらしい。十五の年齢に志を立て、故郷を後に京都へと出て来て其後二年間は何を志したか僕も聞なかつたが、何でも十七の年に同志社に入つたらしい、同志社に入つて後の學資は寫字、代書、子供に英語の初歩を授ける位の内職をして支へて居たのである。僕が知つた時は十九歳の青年ながら、僕等のやうに小供じみては居なかつた、安藤は才子でもなく面白い男でもなく、而も僕等悉く彼の配下に馳せ参じたことは到底諸君の想像が出来ない程で、僕等は我知らず彼を崇拜し、彼の言語彼の一舉手一投足、何とはなしに僕等青年の心を引付けて了つたのである。

学校の教師は安藤を正しい利發な青年として見て居たが、然しこれぞといふ特種の才能を持たぬ明快しない男として居た。教師の鑑定は如何でも可らしい、安藤が一人雜ると僕等が夜集つて饒舌合ふにしても全然様子が違つて来る、彼が前では僕等の臍白も決して粗暴に流れない。若し又僕等が何となく「物の哀」を感じた晩など、尤も兒供じみた「物の哀」には

違ひないが、そんな晩に安藤が居ると自然と眞面目な、静かな、而も楽しい談話が初まつて其が無益口に終らない。君は笑つてゐるね——僕だつて知て居る君の笑ふ理由は。無論お互は大概夢の幕を先刻に閉ちて了つた、然し少年の時代……少年の時代……

此時我黨の詩人は又もやバイロンを引いて言ふ勿れ大人豪傑の名を、我等少年の時代こそ我等が光榮の時代なれてふ句を口吟んだ。

「驚いた、能く暗記してゐるね、君の引證は悉くバイロンだ。一口に言ふと安藤は僕等少年の魂で有つた。僕はこれまで如何なる婦人にも安藤に注いだ程の愛を注いだことはない。僕は今でも此不思議な戀を話して別に恥かしいとも感じない、戀す、戀で有つた證據には僕は其頃此戀の爲に如何に思惱んだらう、或は焼餅まで焼いて苦るしんだのである。安藤は誰をも公平に親しくして居たが其中でも押川といふ無口な温順しい少年を特に愛して居た。二人は殆ど離れない、そして安藤が押川に物を言ふ時は何時も囁いて言ふ。

時々此二人は相伴ふて京都の町から出てゆく、何處に往くのか解らないが二三日見えないことが有る、誰一人其往先を知らない……安藤は別に隠たてを爲る風でもない、僕は唯だ不審でならなかつた。それに僕の苦しんだのは此不審ばかりでなく實は安藤に斯くまで親愛される押川が羨ましく妬しいのであつた。

僕は色々考へたが遂に安藤と押川が突然消えて無なる理由を知り得なかつた。と言つて安藤の周圍には別に秘密の影を置いて居ないので、彼は磊々落落と加稱して、一種の無頓着其下には大なる實力が潜んで居ると人から推測されるやうな、そんな術も有たなければ、高く構へて自若として居るといふ青年の癖も有たない、唯だ平然と胸を開いて自由に呼吸して居る。

然し彼の感激した時は猛烈な精力を振り起す、そして其精力を決して浪費しない、又如何なる事情があつても決して極點まで情を高めることをしない、とサ先づ思つて居給へ！

其處で僕は何とかして彼の信任を得やうと思つて大に務めた。別に安藤を喜ばす程のことと爲なくとも僕の熱情は安藤も十分に知て居たが、遂に僕は駄目であつた、彼は僕から押かけて親しまうと爲るだけ愈々僕と深く交はることを避ける風が有ると僕が知つた時の悲さと言たら無かつた。

或時非常に不愉快な顔をして僕の處に金を借りに來たが、翌日は眞面目腐つて禮を言つて金を返した。其冬の間、遂に僕と安藤との關係は變らないで過ぎた。僕は押川と、僕と比較して押川は何處の點が僕よりか優つて居るか頻りに考へたけれど別に押川の長所をも見出ださなかつたのである處が幸か不幸か、不意の事で様子がかがらりと變つて了つた。四月の中旬押

川は不治の病に罹り終に安藤に介抱せられながら死んだ、安藤は押川が病氣になつてからは寸時も其傍を離れなかつたが、死んだ後一週間は全く外出しないで居た。僕等は一同押川の死を悲しんだ、蒼白い、無口の、温順しい此少年は初めから長生しさうにも思はれなかつたのである。僕も心から押川の死を悲しんだが然し胸の底で何ものかと密かに待受けて居たらしい……。

或夕僕は宜教師の宅の僕の二室に茫然して居ると、惶しく戸を開けて入いつて来るものがある、見ると安藤で、僕の傍に坐つて、

(君は誰よりも一番僕を思つて居て呉れるから来た……僕は第一の親友を亡くした……僕は寂寥くつて堪らない……押川を知つて居るものは……)と言ふ聲さへ力なく又少し慄へて居た。暫しく窓の方を視て居たが、

(君押川の代になつて呉れ給へな)と言つて僕の顔を見つめた。僕は飛上つて悦こんだ。茶を入れて二人暫しく押川のことなど語り合つて居る中八時を打つた。すると安藤は起つて窓の傍にゆき夕闇遠く叡山の方を見て居たが又僕の傍に来て坐る其様子が何となく沈着かない、そして何か言ひ出しかけて躊躇つて居るやうである。そこで僕は、  
(安藤君、眞實に僕を信じて呉れ給へ!)と熱心に言つた。彼は僕の眼を凝視して居たが、

(宜しい、君そんなら是から直ぐ出やう、僕と同伴に往き給へ。)

(何處へ往くのぞ。)

(押川は黙つて同伴に往つたよ。)

僕は黙つて了つた。

(君は花が引けるかね?)

(あア引けるよ。)

安藤に従つて僕は加茂川堤を上加茂の方へと急いだ、川瀬の上は夜霧が被つて朧にかすみ、林の奥、野の中、處々の火影がちらつひて見える、安藤も僕も無言で歩く、をり／＼在方の者らしい男女に出遇ふばかりで堤の上は宵ながら淋しい。半里以上も来ると安藤は突然足を停めて、

(見給へ、其家だ僕等の往くのは)と安藤は堤の左手の疎な林を透して見える和洋折衷の小奇麗な家を指した。二の西洋窓から光が洩れて居る。

(休職の海軍大佐隅屋といふ人が住んで居るのだ、妹と下婢と一人の娘と四人暮だ。僕は君を僕の親戚の者と言つて紹介するから其積で居給へ、大佐と花を引くのぞよ。)

斯う言はれて僕は無口の押川を學び唯だ點頭いたばかり一言も發しなかつたが、心では不

審で堪らなかつた。春の低い離を廻はつて玄關近く来た時、西洋窓に寄つて居る一人のすりりとした娘の姿が見えたかと思ふと直ぐ消えて了つた。其様子は僕等の來るのを待つて居たものらしかつた。

呼鈴を押すと下婢らしい女が出て来て僕を見て驚いた様子である。

(隅屋様は宅かね?)と安藤が尋ねた。

(お宅で御座います。)

(宅だよ!居るよ!)と太い男の聲が奥で響いた。

通された室は可なり広い西洋間、中央に小さな卓が据えてある。一臺のソファ、安樂椅子の品々まで夜目にも其と解るまでに稍々古びて居るが、何處となく満酒として見えた、食堂にも談話室にも遊戯室にも宛て、居るらしい。

卓の傍に年輩五十位の脊の高い骨格の逞しい男が、艦内で着る筒袖の寝衣を着て突立つて居る。能く見ると色の淺黒い頭髪の粗い、唇の厚い、眼のぎよろりとした人物である。

(ヤア安藤君!待ち焦がれて居た、君達の來るのを待ち焦がれて居たぞ。押川君は?)

(押川は死しました!)と安藤は力なく言つた。

(死んだ?押川が、押川が。そして其方は?)

(御紹介致します、これは私の親戚の者で、仁木秋之助といひます、宜しく……………)

(宜しい、宜しい、大に結構、花は引けるだらうね?)

(引けますとも!)

(占めた!直ぐ初めよう、オイお梅、何處に居るのだ?花の用意を爲ろ、大意!、そして茶を持て!)と言捨て、隅屋大佐は次の日本室へ入つた。安藤は小聲で、

(實に君に濟まない、僕は氣の毒で……………)と言ひかけたのを僕は手を振つて止めた。

(來給へ!君、何とか言つたね、さうだ仁木君、此方へ來給へ!)と大佐は僕を呼んだ。

日本室は八疊敷の、疊は暮に取更へたばかりと見えて新しいが、矢張西洋間と同じく柱も障子も襖も稍々古ばけて居た。大佐は胡座をかいて札を切つて居る、其傍に大佐よりか十歳ばかり若い婦人が座つて居た。これが大佐の妹らしい、眼のしよぼくした、薄い唇の、色艶の可くない女で頭をおはこに結んで居た。

(此方は押川の代だ、安藤君が押川の代に連れて來たのだ。如何だ、一つお手並を拜見するかな!)と僕と妹とを見比べて言つた。

婦人は丁寧に僕に禮をして前に屈んだ時續けさまに咳をした。僕は西洋室の方を振り向いて見ると安藤は最早其處に居なかつた。

(止せ其様咳を！ 犬が咳をするやうだ！) と大佐は怒鳴つた。僕が席に就くと直ぐ札が撒れた。大佐は忽ち逆上せて了つて、僕の一寸した打ちこなひでも嚙むいふし、妹は頭から皮肉ばかり言はれて怒鳴られるし、妹は慣れて居ると見えて對中にならなかつたが、大佐が(罰あたりの死ぞこない)と言ふや真赤になつて怒つた。

(お前様は女房を我鳴殺して、今度は私を殺す積かね?) と烈く突掛つた。

(成程さうかね?)

(私を殺す積りかね?)

(成程!)

(私を殺す積りかね?)

(成程!)

一方は冷やかし一方は喚く、暫時此悶着が續いたが、斯な間に挾つた僕こそみじめなものさ。元來何故斯な處へ安藤が來て來たのだらう、自分は餘り上手な弄花者でもないのになど考へて居ると、又もや僕が大變まずい札を打た。

(君は駄目だ！ 大手下だ!) と休職大佐は喚き立てた。此時は僕も心から大佐が憎かつたが辛棒して別に口返答もせず嫌な顔も見せなかつた。この苦しい思を二時間ばかりさせられ

て僕も殆ど當惑して了つたが、これで終と思ふ頃後方で衣服の摺合ふ音が爲たので、振向て見ると何時の間にか安藤と娘とが二人並んで西洋間から此方を覗込んで我々を見て居るのであつた。

(春枝！ 煙草を持って來て呉れ。) と親父の大佐が言つたのを、春枝は半分まで聞かず驚いて姿を隠して了つた。娘は非常な美人といふ程ではなく、寧ろ蒼白い、寧ろ瘦きの方であるが其髪、其眼、僕は前にも後にも見たことは無い程であつた。花が終で後、僕は幾何かの金を拂つて漸と苦しい時間を免がれ、後は西洋間に衆集まつて卓を圍んで談話することになつた。

此時初て安藤は僕を春枝に紹介した。僕もさまりが悪く胸が騒いだが春枝は餘程恥かしさうな内氣な風を見せた。然し例の安藤の自由なる伸々せる態度は自然に我々を動かし、僕も娘も間もなく平常に復した。主人の大佐は淺草海苔位で日本酒を飲み初め、僕等には葡萄酒を勧められ、安藤は春枝と大佐の妹を相手に四方山の話をして聞かして居る。大佐は耳を借さないで唯だ酒ばかり飲んで居たが終には兩臂を卓に突いたまゝ、居眠をはじめて居た、後で聞けば斯ういふ場合には必定英國に新造軍艦を受取に往つた時の自慢話が出るさうであるが、幸と僕は此晩それを聞かされないで済んだのである。

安藤の話して居る間、僕は葡萄酒を啜りながら密かに春枝の様子ばかり見て居ると、春枝

の眼は絶えず安藤に注がれて居る……其顔だけでも春枝は安藤を想ひ安藤は春枝を愛し二人互に戀して居る様は知れる、春枝は唇を少し開き、頭を稍々前に屈めて居たが、蒼白い顔も此時は微紅を帯びて生々して居た。折々深い長息をするかと思ふと急に眉を垂れて夢見るやうな暈をする。そして閑に軽く獨笑を洩らす……僕は安藤君萬歳を肚裡で三呼した……然し、有體なことをいふと其時何となく安藤が妬ましかつた……

夜も少し更けて、僕等は最早歸らんければならぬ時刻となり、起上ると居眠つて居た大佐は別に止めもせず、寢老聲で、

「さうだね、随分談話が長いやうであつた、左様なら、と遠慮なく言つた。春枝は玄關まで送つ来て安藤に寄添ひ、小聲で、

「又何時来て下さいませう。」

「二三日中に來ます、決定。」

春枝はにこくと、

「あの方も伴れて來つしやいな。」

「さうですとも！ 然ですとも！」

「謹で御伴仕るで御座ります」と僕は肚裡で言つた。

さて安藤は如何なる縁で大佐の家に出入するやうになつたかと、歸路に聞いて見ると、六月ばかり以前に安藤が一人上加茂に遠足に行つて其歸路。今にも降つて來さうな嫌な空模様物寂しき夕暮を辿つて來ると、堤から少し外れた畑の小徑に當り人の苦吟く聲がするので猶豫なく飛で行つて見ると一人の男が脚蹠を挫折して苦んで居たのであつた。其男が則ち陋屋大佐。車はなし、手を借る人は近處に見えず、安藤は非常な骨折で漸く大佐を其家に運び込み、驚いて蒼くなつて居る妹や娘に力を附けて應急の手當をする、直に市街へ馳せて醫師を迎へて來る、一通ならぬ盡力をする中に晩天近くなつた。安藤も全然疲勞れて了つたので妹の許可を得、西洋間のソファに身體を投げて其儘朝の八時まで眠つた。起き上るや直ぐ歸らうとすると、家族の者に斷つて止められ遂に朝餐を馳走せらるゝことゝなつた。安藤も夜の騒動の中は能く娘を見なかつたが、朝になつて娘に遇ふや深くも彼の心を動かした。朝餐の時、妹は安藤の親切を繰返して感謝し其義侠を褒めちぎつたが春枝は何事も得言はず茶を進める手も慄へるばかりで、羞しさに耐え得ぬ様であつた。

朝餐の終る頃、大佐は大聲で煙草を求めたので妹が其床の傍に行くと、

「彼方の名は何と言つた！ 最早歸つたか？」と訊ねた。

「イヤ私は未だ此處に居ます」と安藤自ら答へて其病室に入り、如何ですか、最早少は快し



う御座いますか。

(大變快いやうです、何卒か此方へ。)

安藤が床の傍に寄ると頻りに安藤の様子を見て居たが、

(イヤ難有う御座りました。時々遊びに来て下さい。御姓名は、失禮ながら！)

(安藤権三と申します。)

(さう、さう。何卒又遊びに来て下さい。家でも最早お手を借るやうな用が無いから失禮だ  
がお歸りなつたが可え、貴宅では心配して待つて御座るだら！)

其處で安藤は妹に挨拶をし娘には唯だ辭儀をして歸路に就いた。二回目の訪問をする迄に  
は稍々時日を経たが、其後は次第に足が繁くなり、彼是する中、秋になる、安藤は運動に出  
た序に立寄つた格で、大佐の家に入出入する、立寄れば必ず晩までは遊んで居るといふやうに  
なつたのである。

元來隅屋大佐といふのは我海軍の未だ極て不完全な時代から永年務めて来て、其間に相應  
な財産を作つたもので、今は退職して浮世を他所に京都の片田舎に暮らして居るのである、  
殆ど文筆のない人であるが、外見の粗大なるに似ず利巧な男で、時には非常の手腕を示すこ  
とがある。性來強情我慢の塊ともいふべく、無愛相極まる人で別して知らぬ人にはさうであ

る。全世界の人間を悉く敵として喧嘩して居るといふ風すら見える位。全然我儘息子の子それ  
の如く、道樂のありたけに其身を任かして居る。或時安藤等と結婚のことに就いて談話が有  
つた時、

(結婚………結婚、乃公は誰に娘を呉れて遣らう？え、如何したら可かの？乃公が女房を  
擲つたやうに娘の亭主が娘を擲つたら乃公如何して呉れう？其も可えが、誰に呉れてやらう  
？)と言つたことがある。先づ休職大佐隅屋といふは斯な人物。

其處で安藤は數々大佐を訪ねて行つたが、大佐を訪ねるのでない、勿論其娘を見にゆく  
であつた。或日、夕空晴れて落日の光猶ほ愛宕の山頂にのこる頃、安藤は春枝と庭に出て何  
か親しげに話して居ると、大佐が其處へ来て、苦々しげに娘を見て安藤を他處に連れて行  
き、

(オイ君！君は乃公の唯た一人の娘と何かぐちや〜話して大變可え娛樂を發見したが乃公は  
此年で退屈で堪らん。誰か一人連れて来て呉れんか、でないとな乃公は花を引く相手が無んだ、  
え、如何だね？乃公も君の娛樂に文句は言はない。)

と言はれて安藤は其翌日から押川を同道することにしたのである。憐むべし押川は秋から  
冬を押通して大佐から我鳴なられ皮肉を言はれ罵倒せられて弄花のお相手をさせられたので

ある。これで諸君も押川の死んだ後、何故安藤が僕を大佐の許に伴ふたかといふ理由も全然讀めたいらうと思ふ。安藤は歸宅の途すがら以上の委曲を僕に話し、さて最後に斯う言つた、

(僕は春枝を戀して居る、彼は實に可愛い娘だ、彼は君を好いて居るよ。)

前に言つたか如何だか、忘れたが、僕は其頃獨り一室に籠つて居る時などは、折々女のこと、戀のこと乃至さういふ春めいた思ひ沈んで夢現の時を過ごすことも有なりながら、而も女を畏れ女を避けて居たものである。然に己むを得ぬ事情とはいふものゝ、兎も角初めて年若い娘の春枝と話するやうになつた。春枝は總じて言ふと十人並位の女であるが、何方を見ても運葉娘ばかり揃つて居る中に春枝のやうな娘は全く珍らしいので、無垢といはうか自然そのまゝといはうか、如何にも單純で如何にも沈着で、寧ろ沈み勝のおつとりとした趣のある娘であつた。僕には其優しい微笑、其真心をうち出した鈴のやうな聲、其軽く悦しげに笑ふ様子其儼然と人を睥視する目ざし、何れも氣に入つて了つた。實は今日なら斯ういふ娘を見つて僕も左まで心を動かさない、といふものは最早此頃は寂びしい夕暮の散歩などいふものに趣味を持たないと同じ格である。然し以前は何して……

勿論諸君は今日まで、一度は必ず戀の經驗を有て居るだらうから、戀は如何して初り如何いふ風に發展するものか先刻御承知のこととして僕も其頃の僕の經驗を長々と説かないこと

にするが、手短に話すと、僕は何時の間にか戀に陥ちて居たものらしく、安藤に伴ふて大佐を訪ふ毎に弄花と來てはうんざりしながらも春枝の姿を見、其傍に近き得るので、言ふに言はれぬ樂、その甘いとも苦いともつかぬ歡を感じたのである。僕はこれを壓へやうと力めて見たが無益で、これぞ戀と思つた時は既に僕の方では壓へきれぬ程に情が高つて居たのである。樂と妬と羞と此三個は互に紛糾合つて僕を悩ましたが然し別に夜眠むられんことも無く食物が甘くない程の事もなかつた唯だ朝から晩まで此思が胸に蟠まつて居ることを自分意識して居た。安藤が春枝を伴ふて庭の散歩から家に入つて來る時など、春枝の様子は至で融たやうで、身も魂も安藤に打まかし、安藤に吸取られ、安藤が見る方を見、安藤が笑へば笑ふ……斯ういふ處を見た時の僕の心の中の種々の感情はとも一々言ふことが出來ない。唯だ見る、安藤は斯くても決して自分の自由を失はなかつた。思ふに安藤は春枝と分れて居る時など春枝の事を思ひも爲なかつたらう、彼は平常の通り、僕が大佐の家に伴はれない前に見た通り、相變らず平易率直な、悠然として樂しさうな男であつた。

月日は進み、二人は幸福……然し他人の幸福を詳しく説明することは僕左まで嗜好の方でないから止す。

其内漸く春枝のあどけない様が無くなり、其蕩けた魂が次第に波立つて來た様を僕は見て

取つた。安藤は次第々々に冷却て来たのである。白状するが僕は此等の様子に氣が着た時は窃に喜こんだので、決して安藤の舉動に就き少しの憤も持たなかつた。

我等が大佐の宅を訪ふ足は次第に遠くなり、會う毎に春枝の眼は涙の痕を止めて居た。僕が素知らぬ風で、

(如何だね、今日隅屋様へ行くのだらうか。)と問ふと、安藤は冷かに僕を見て、靜かに、(今日には行かない。)と答へた事もある。又安藤が春枝のことを僕に喋する時は妙な微笑を浮かべたこともあるやうだ。要するに僕は極して押川の代と成損なつたのである、が押川は百倍僕よりも好人物で又馬鹿であつた。

此處で一寸諸君に話して置く一人の人物がある、矢張同志社の生徒であるが、其頃僕等よりは四五歳が上で、流山といふ、風采からして一風變つた男。實は執拗者であるが、時々奇抜なことを言つて人を嚇かし、又人の弱點など能く看破して痛快に罵倒することがある、詩も歌も小説も嫌で所謂の實學黨の一人であつたが、其時自分では何一つ爲出かすでもなく學び得たでもない、何の學校にも斯んな風な男の一人と半分位は必定居るもので。

これが僕の安藤に愛着して居る様か尋常でないのを見て冷笑し初めた。僕も最初は一言のもしに彼を罵倒して退返してやつたものゝ二度目には大真面目になつて(我等の友義など君

に了解るものか)と論じ、然も追返しだけは爲なかつた。彼が去る時、

(君は安藤の許可を得なくちや安藤を賛ることすら出来ないのだ)と言つたのを聞いた時は有聲に僕の胸は穩かならず、此一語は深く僕の心に沁み込んだ……其筈で、僕は半月以上も春枝を見ない……自尊の念、戀、取留もない行末の考など種々の雜念が紛然として起る……僕は突然起つて唯獨り大佐の宅へと飛出した。

如何途を歩いたか知らぬが、たゞ記憶して居るのは幾度か路傍の石に休息したことでも其も疲勞たからではなく、昂じつめた心を押へる爲であつた。玄關に着いて未だ呼鈴も押ぬうちに早くも春枝が走り出て僕を見るや、聲を慄はして、

(安藤様は?)

(來ません。)

(來ません!)

(さうです……用事の爲に來られないと言つて呉れ……と僕に傳言けました……。)

何と言つたか僕も能く憶へない、僕は下を向いたまゝで頭を上げ得なかつた。

春枝は黙つて身動も爲ないで僕の前に立て居るのを、僕はちらと見ると、直ぐ春枝は顔を背向けたが二の大きな涙が靜かに其頬を傳つて流れ落ちた。不意の驚愕と悲哀とが痛ましく

も明々地と顔に現はれ僕も見て居られなかつた、突然春枝は身を投げるやうに走つて其姿を隠して了つた。僕も急いで内に入り西洋室に通ると、大佐が居て、

(これは如何した、君一人かね?)

(さうです、一人参りました)と僕はおどくして言ふと、大佐は椅子から飛立つて奥の間に入つて了つた。

僕は今日が日まで斯な馬鹿氣た堪に出逢つたことはなかつた。餘り人を恐にして居るではないか然しこれも自業自得で爲方がないと室内の檻に入つて居る豚のやうに彼方此方のそついで居ると、大佐の妹がやつて來たので漸く一方の活路を得、二人で談話して居ると大佐も出て來て談話の仲間に加はる、其中に春枝も眞蒼な顔をして現はれて來た。大佐は滑稽げながら安藤の噂を初め、

(安藤は花は知らんでも執將基位は出来るじやらう、なあ仁木君)と言ふや、春枝は突と起て奥に入つて了つた。僕も面白くないから歸ることにして玄關に出ると、春枝は既に其處に僕を待て居て、小聲で、

(後生ですから明日も來て頂戴な、今日より早く來て直ぐ庭に廻はつて頂戴な、其時刻は父上が晝寐を爲て居る時分ですからね、後生ですから。)

次の朝安藤は僕を訪ねて來たが僕は會はないで午後三時頃大佐の宅にゆき直ぐと庭に廻はつた。春枝は植込の蔭の芝生に居て僕の來るのを待ち詫た様子、頭髮は亂れて頬にかゝり、左なきたに蒼白い顔には堪え難き悲哀の影重く覆ひ、夜通し眠り得なかつたと見えて眼の光鈍く疎疎く、苦惱の如何ばかり烈しかつたかを示して居た。僕は其傍に並んで、座はつた。二人は暫時言葉なく、春枝は手に小枝を弄んで居たが、頭を垂れたまゝ、

(仁木様……)と言つた限、次の言葉を出し得ないで唇を慄はして居るので、見ると今にも泣き出さん様子、迫來る涙を凝然耐えて居るやうである。僕は言葉知らかにこれを慰め安藤の愛の深きなど語らざるを得なかつた。春枝は悲し氣に之を聞いて口の中で何か言ふやうであるが聞き取れない、二人は暫らく黙つて居た。

(安藤様は最早私のことを思つてなぞ居なさらないでしようよ……)と春枝は漸く聲を出した。

(決して、其様ことは有りません。)

(とても私は此後……毎晩眠らないで泣いてばかり……眞實に如何したら、如何したら可いでしょう……)

(春枝の眼には充分の涙)

(親切な方とばかり私は思つて居ました。……今は、今は……)と涙を拭きながら  
(先達から様子は知つて居ました……)

僕は聞いて居るうち次第に胸を掻きむしられるやうで、春枝の蒼白い顔、涙の露に濡れた  
長い睫毛、わななく唇から目を離さないで居ると、一には春枝の戀の我身の上ならぬを思ふ  
て悶へ、二には春枝が斯くまでに僕を信じて呉れるのを喜び、三には心筋かに安藤と春枝の  
仲を元の通り爲てやりたいと思ひ、……四には僕自身の戀を犠牲にして春枝の心を動か  
したいものと望み……これ等の感情が渦巻き起つた。

(然し幾時でしょう?)と春枝は突然眼を睜つて問ふた、僕も忙がしく時計を出して見て、  
(四時です。)

(オヤ!)と驚ろいて起上り、小さな紙片を僕の手に渡すや急いで家の方へ行つて了つた。  
僕は追すがつて此次には必ず安藤を伴ふことを約し、幸な戀人も斯くやとばかり、そつと裏  
門から田甫路へ出た。

翌日は朝早く安藤を訪ふ積りで宣教師の宅を出たが、路すがら自分は憐れなる乙女の使命  
を果し又自身の戀を犠牲にする爲に往くのだから少も疚しいことはないと自分で辨解しながら  
も猶ほ安藤に顔を合はすべく氣憶れがして胸は流石に穩かでなかつた。安藤の室に通ると

青木といふ美作家。年中「月に村雲花に風」といふやうなことはかり唸つて居る人間が今し  
も例の自作を自慢さうに讀んで聞かして居る處であつた。僕も爲ことなしに座はつて聞いて居  
ると、青年あり一少女を戀せり而して之れを殺しぬといふ種類のもので安藤も持て餘して苦  
い顔をして居る。機會が悪いと思つたが仕方がない、美作家先生の立去るや、直ぐ序文なし  
に僕も本文に取かゝつて春枝からの紙片を渡すと、安藤は怪し氣に僕を見たが、封を切てさ  
つと目を通し、何にも言はない、たゞ微笑した。暫時して、

(オヤ、君は大佐を訪ふたのかね?)

(さうだ、昨日獨りで往つた。)と斷乎僕は答へた。

(さうか!)……と言つて安藤は平氣で燐寸を摺り煙草を煙らした。

(君!君は春枝嬢を可愛さうだと思はんかね……君が若し昨日の様子を見たら……)と  
僕は詳はしく昨日の事を語り、語りながら僕自身の情が迫つて來た。安藤は何も言はない、  
たゞ煙草をふかして居たが、終に、

(君は昨日植込の蔭の紅葉の下で彼女と話したね。僕も此春はよく彼處で二人並んで話した  
ものサ彼時は青々と楓が繁り、そよ〜と吹く春風に楓の葉が日の光に輝いて……僕等  
二人は眞實に楽しかつた。……今は秋風が吹いて、そろ〜と楓も染つて來たが、最早散

るにも間が無くなつた。」  
 これを聞いて僕は心から憤激し、大に安藤の無情冷刻を責め、散々少女の情を誘ひて其極度に到らしめながら斯くも突然に之を捨てるといふ權利を安藤は有つて居ないとまで斷言し兎も角も今一度訪ねてやつて、せめては離別の言葉位交はして呉れろと求めた。すると安藤は、

「君は僕の友人として僕を批評するのは可しい。併し僕の辨解も聞いて呉れ給へ……」  
 と言つて言葉を送切らし、妙な微笑を浮べて、

「春枝嬢は立派な少女だ、そして何等の不都合も僕に向て爲なかつた、それに反して僕は彼女に大變負ふ處がある。然し僕が彼女の處に行くことを止したのは極めて單純な理由で——要之、行つた處で無意味くなつたのだ……」

「なぜ？、何故？」と僕は急込で問ふた。

「何故ツて、僕が春枝嬢を愛して居る間は、僕は全く春枝嬢のもので、何もかも、僕の生涯も悉く彼女に與へて僕の將來のことは何んにも考へなかつた……然るに今は其様感情は失くなつて了つた……可いかい、僕が心にもない嘘偽を以て戀を弄んだら如何する、君は可いと思ふか？……然し春枝嬢は其れとも僕の憐愍を願ふのだらうか。若し彼女が立

派な少女なら其様ことは欲しまし、若し又彼女が僕の……僕の同情に由て慰められたいといふなら、さうだ、彼女には其を受けるほどの價値がないよ！」

安藤の無遠慮な言葉、殊に僕が内々戀して居る女を斯くまでに言ふのを聞いて僕は眞赤になつて怒つた。

「止し給へ！止し給へ！僕は知てる、何故君が春枝嬢の處へ行かなくなつたのか、僕は能く知てる」

（何故だ？）

（瀧子嬢から止められたのだ。）

此一語は確かに安藤の急所を突いたと僕は思った、といふのは近頃安藤は瀧子といふ氣輕な利巧な、二十五になる、色の黒い女から非常に可愛がられて、安藤も亦た月に五六度は必ず訪問し、殆ど離れ難ない有様になつて居たからである。僕の顔を見て安藤は頗る眞面目に

（恐らく然だらう）

（恐らくじやアない確かに然だ」と僕は喚いた）

安藤も終に堪え得なくなり、突然起つて帽子を取つて出て行かうとする。

（君何處へ行くんだ？）

(散歩に行く、君と青木のお蔭で頭痛がして来た。)

(君は怒つたのか?)

(否、怒らない。)と例の優しい微笑を浮べて言つた。

(可しい、兎も角春枝嬢に僕は何と傳言すれば可のだ?)

(さうさ……)と安藤は一寸考へ(過ぎ去つたことは二度と返らない、と言つて呉れ給へ。)言ひ捨て、室を出て行くので僕も後に従つて戶外に出た。すると入口に立て帽子を真深に

引きながら、  
(そして彼女は非常に顫動して居るかね?)  
(非常とも非常とも!)  
(氣の毒なことだ!君よく慰め給へ。君は彼女を戀してる、ねえ君。)

(さうだ、僕も彼女が好きに爲つた、恐らく……)

(君は戀して居る)と安藤は言つて僕の顔を視たが、僕は言葉なく踵を轉らし、二人は左右

に別れた。  
家に歸るや僕は全然熱病同然。僕は思へら、(自分は自分の義務を盡し、自分の望を捨てたのだ自分は安藤に向つて春枝嬢の戀に復れと熱心に勧めたのだ……)然らば自分が正當で

ある。安藤は爲れば如何にでもなる時爲ないのである。又僕は安藤の無頓着が不平の種となり(自分を妬みも爲ないで却て自分に春枝を慰めろと言つた。……)春枝は其様に平凡な

女だらうか、同情する價値すら無いだらうか?此處に一人あり、汝が斯くまでに蔑視する少女の眞價を解する者一人あり。則ち仁木秋之助である!……然し如何したら可いだらう

!彼女は自分を愛しない……否今は未だ安藤の愛の恢復を望んで居るから自分を愛しないのだ……然し今後は……何時か自分の思が彼女に届く……自分は何等の要求

をも爲まい……自分は全然自分を彼女に捧げて丁う……春枝嬢!貴嬢は到底僕を愛して呉れますまいか?……決して……断じて……)

僕は泣き……僕は消え入るばかり……天氣は悪いし……雨は瀟々降り出して窓硝子を敲く、山々は雲に隠れ、古い都は灰色の霧に包まれて居る。晝飯の時僕の眼が赤く服

れて居るのを見て例の宣教師夫人は心配さうに、如何したかと聞いたが僕は對手にも爲す、食事を終るや急いで大佐の宅を訪ふた、途々春枝に何と言うか安藤の有りのまゝを言うか一時を偽はらうかと苦心したが遂に思ひ定めぬ中に早くも大佐の宅に着いた。

家族は西洋間に集つて居た。僕の姿を見るや、春枝は見る／＼顔の色を失なつたが、然し其儘席を離れせず。主人は何時になく元氣に快活に僕と話して、僕も力めて巧く相手に爲

つて居ると、其中主人は妹と談話を初めたので漸く機会を得、窓の下に居る春枝の傍にゆく

(貴様又た一人?)と春枝は囁いた。

(さうです、今後は何時もさうでしよう、多分。)

春枝は目を睜らいた。

(私の手紙を渡して下さいまして...)と聞えるか聞いてぬかに問ふた。

(渡しました。)

(まア!.....)

「そして貴嬢に(過ぎ去つたことは二度と返らぬもの)と言付けて呉れといふことでした。春枝は躊躇き起つて、急速しく室を出て了つた。

僕は歸る途すがら春枝にも安藤にも又自分にも恥かしく、譬へ負傷した手足を一思に切斷した方が苦痛を永引すよりも可いとした處で、誰人が憐れむべき少女の心にあんな殘酷な打撃を加へるの權を僕に與へたか?と思へば思ふほど心は掻き亂れ、其夜は容易に寝就けなかつたが終に眠つて了つた。前に言つた通り、總じて僕は「戀」の爲めに眠られないなどいふことは是までに一度もなかつたのである。

さて僕が大佐の宅に通ふ足は益々繁くなり、又安藤とも以前の如く往來して居たが、唯だ安藤も僕も春枝のことは少しも話さないばかりであつた。然し僕と春枝との其頃の關係は多少妙なものはないので、春枝は僕に親んでは居ても其の親さの中には戀となるべき分子は少しも無い。春枝も有繁に僕の深い同情を認めざるを得ないで僕と熱心に語る.....何を語るのか諸君推して見給へ.....安藤の事を語る、たゞ夫れ安藤のことを語る外には何も話さないのである!春枝は全く安藤のもので春枝のものでない、僕も春枝の自我を喚び起さうと勉めて見たが無益であつた.....春枝は黙言つて相手にならないか、然らざれば安藤の噂を初める、到底僕も忍ぶことが出来ない、僕は春枝が(貴郎も御存知でしょう、そらあの.....)と言かけると胸が痛くなつて身慄を爲た。とても此様子では安藤と代つて僕が春枝の戀人になるなど思ひもよらぬことと思つた。併し春枝も初の中は顔瘦がして色艶も悪かつたが、日の経つにつれて次第に快くなり、胸もヤ、開いて來たらしかつた。負傷した鳩が未だ全く本復しきらないものと見て可らう。

斯うして居る中の僕の立場は益々忍ぶ可からざる者となつた。下劣なる感情に動かされるやうになり、春枝の目前で安藤を悪く言ふことすら有つた。これ到底忍び難きことである、僕は斷然春枝を思ひきり斯んな不自然な關係を絶つて了うかとまで思つたが、さて、春枝と



離れる……とても僕には出来ない……然らば戀を打明けて言うか——これも僕には爲得ない。そして結婚の一事に思ひ及ぶと僕の胸が騒がしくなる、僕は僅に十九才の少年將來の多い身を早くも係累の中に投げ込むかと思ふと堪らない、第一僕の父が承諾するだろうか、安藤の仲間の冷笑が耳に聞へるやうだ……など氣を揉んだが、可くしたもので理屈は如何にでも立つもの、僕は終日結婚のことはかり思ひ、春枝と同棲になつたら故郷に歸つて、矢張り和洋折衷の小瀟洒した家を彼の海濱に建て、貰ふてなど空想を廻ぐらしたのである。そして僕は今こそ春枝は唯だ僕の同情の深いのを感謝して居るだけであるが、感謝は一轉して情となり、情は一轉して戀となる其途筋を思ふと堪らなくなつた……そして此頃から安藤に會ふことを避けるやうになつた。

遂に或日僕は持て居るうちの一番上等の衣服を着て大佐の宅を訪ねると、春枝は一人窓の下で書物を讀んで居た處で、僕の姿を見るや靜に其膝に置き不審さうに僕の顔を見入つた。僕は躍る心を壓へて其傍に寄り、

(何を讀んで居ます?)

(小説で御座います……)

(貴嬢は西洋の小説は好きませんか……)と言ひかけると春枝は急に止めて、

(貴郎安藤様に頼まれて入來つしたのぢやないの……)  
安藤の名の聲の調子、半は歡び半は羞かしい其顔つき、總てこれ戀しさの思ひ餘つた符で僕は全然胸を貫かれたも同じ事。

最早耐まらん、春枝と断然分れて了うか、それとも永久安藤の名を言はさないやうにするか、二に一を定んものと、僕は口を切つて言ひだしたが初は何を言つたか夢中で今も覚えて居ない、春枝も何のことだか解らない様子、僕は耐え兼ねて、

(僕は貴嬢を戀して居ます、貴嬢と結婚したう御座います。)と言ひ放つた。

(貴郎が私を戀して?)

と春枝は踏躑き起つた。僕は春枝が室を飛び出すだらうと思ひ、呼吸もつかないで、

(何卒返事をして下さるな、何とも言つて下さるな、明日の朝まで、明日まで考へて下さい最後の御返事は明日開きに來ます……)

僕は永久貴嬢を愛します、僕は貴嬢の愛を求めません、たゞ僕は保護者です、朋友です、今返事としては可けません……明日まで)

と言ひ捨て、僕は室を飛出した、廊下で大佐に遇たが大佐は僕の來て居たのを驚いた風もなく、頗る氣嫌可く僕を見て微笑し、一個の柿を呉れた、思ひがけぬことで僕は嬉しさに言

葉も出ない。

(庭に生た柿で、佳い柿だよ、眞實に……)

と大佐は言つたが眼で禮をしたまゝ其柿を握つて戸外に出て柿を握つたまゝ宅に歸つた。歸つてから翌朝まで僕は如何に過したか諸君も想像が出来たらう、さすがに其夜は寝苦しかつた。(若し拒絶したら……)と考へると胸も張裂るばかり苦しい(さうだ、必然拒絶するだらう……何故自分は斯なに急いだのか知らん……)

とても思ひ續けることが出来ない、氣を變へやうと思つて故郷の父に手紙を書いたがそれも無茶な、自暴なことばかり書いた。

愈々今日はいふ日になつて僕は家を出る時暫時玄關に佇立まつて(今日歸つて又此玄關に入る時は如何な心持で入るだらうか)と思つた。大佐の宅が林の間から見えた時は思はず足が縮んで(心配)が喉につまつて呼吸苦しいやうに感じた。

(若しも春枝が唯だ一人室に居たら——萬事休す……様子で知りたいものだ、面と向て言葉で拒絶され度く無い)と念じた。

足が紛れるやうで玄關の石段を上るにすら躓きさうにした。西洋間に通ふつて見と僕の願つた如く春枝は叔母と一緒に居た、僕は眞面目に嚴かに辭儀をして老婦人の傍の椅子に着い

た。春枝の顔色は平常より寧ろ蒼白く、力めて僕の視線を避けて居るやうである、叔母が突然席を起つて次の間に入つて了つたのを見た時の僕の心持は如何だつたらう……僕は窓の外を見て居る、春枝は一言も發しない……思ひ切つて、  
(何とか言つて下さいな、春枝嬢……)と言つた聲も切れなくに慄へて居た。  
春枝は横を向いた——見ると睫毛の先が涙で光つて居る。

(とても無益なんでしょう……僕の望は……)  
春枝は羞しさうに周圍を見廻はして居たが(仁木様……)と言つたさき後を言はず、はらくと涙をこぼした。

(え、不可ないんですか、不可ないんですか?)と急込んで言つて僕の聲は嘔れて居た。

(何卒貴郎父に言つて下さいな、私は……)

(分解りました……御親父に申します……)

(又見捨てないでね、安藤様のやうに……ね、何卒……)と留度なく流れる涙をハシケチで拭きながら私語いた。

僕は思はず身を寄せて、

(春枝様! 僕は貴嬢のものです!)

と、それより僕は將來の事など語つて居ると間もなく、大佐の咳拂がして重々しい足音が廊下でしたと思ふと、春枝は僕の方を見向きもしないで室を出て了つた、大佐は昨日よりも更に上氣嫌で笑ひながら下らぬ話を爲かけたが、僕は唯だ嬉しさが溢上げて談話どころでない可い加減に相手になつて、間もなく暇を告げ外へ飛出した。

大佐の宅を出て途の二三町も来ると、僕は思はず帽を空に投上げて「萬歳」と、叫びだ。

然し此時から僕の心は次第に向を變へて来て種々の疑念が起りはじめたのである。僕は兼ての大佐の結婚に關する心持を想起すと共に、(老爺、巧く仕組んで置いたな!)と思はず口に出た。

(然し、そんなら春枝は自己のものだ、自己のものだ!)と僕は眞實のこと言ひつゝけたが(然し)も(そんなら)も(春枝は自分のものだ)も僕の心に何の深い強い飛立つやうな歡喜を起させないで、たゞ我儘が通つた時の心持と同じであつた。若し春枝が僕の希望を拒絶したなら僕の心は火のやうに燃えたつたに違ひないが頗る容易に承諾されて見ると何となく張合がない、そこで 自然と斯いふ疑も起る、(果して春枝が安藤を愛して居たのなら、さう容易く僕の申込を承知する筈がないだらう……して見ると春枝は僕を愛して僕の望を納

れたのではなく、今の場合誰かと結婚して了つて失戀の苦をまぎらしたいのである……)そして僕が差當り一番可かつたのである……)以上のやうな取留のない怪しい思に惱まされて僕は今日出た宣教師の宅の玄關を入つた、然し兎も角も嬉しかつた、非常に嬉しかつた、熱ある血液は身うちを狂ひ廻はつた、……が翌朝……

睡眠の力ほど驚く可きものはない、身體ばかりでなく心までが清新くなる、僕は翌朝になり眼が覺ると前の日のことを想ひだして一種不安の念を感じた、僕は確に昨日までの僕のあらゆる行動を自から恥ぢたのである、春枝の父に會ふて一條を話す段を思ふと我知らず胸が穩かでない。林の奥で狐が犬の吠ゆるのを聞いたと同じことで遂には古栗の森から追出され、ひき出した白い齒が待受けて居る!……(何故自分は斯なに急いだのか知らん)と呟いた、が春枝に戀を打明けた後で感じた時のそれとは全然意味が變て居るのである。

然し兎も角も僕は其日大佐の宅を訪ねた、大佐は甚だ氣嫌よく迎へて、これから一寸近處に行て來るが悠然遊んで行けと言つたのを僕は止めた、春枝と二人で指向になるのを避けたのである。春枝はたゞ夫れ春枝であつた、悦しさうでもなく哀しさうでもない、美麗でもなければ、醜くもない、僕は哲學者の所謂客觀的に春枝を眺めて居た、恰度食つた後で皿を眺めると同じ格である。然し決して楽しくない譯ではない、僕は春枝を見て居るうち、種々の

空想を描いて夢心地にもなつた。既に斯う同所に居て見ると最早僕は夫で春枝は妻となつて居る心持がする、さてさうなると夫は夫、妻は妻の途を歩みだすもので……、

(貴郎父に被仰つて?)と二人指向ひになるや春枝は直ぐ斯う聞いた。

僕は胸にぎつくり、而も僕は此瞬間に斯う思つた(春枝嬢、貴嬢は打壤を急いで居ますね。)そして僕は

(否未だです、直ぐ言うと思つて居ます。)

然し約束だけで僕は夫に一言も言はず、たゞ歸りがけに一寸(少しお話し致したいことがあります……何れ……)と豫告して置いたばかりであつた。

(左様なら!)と僕は春枝に言つた、春枝は(又お目にかゝります!)と言つた。

最早長くは話さない、諸君も聞くのに疲れたらうと思ふ、一口に言へば僕はそれぎり二度と春枝に遇はなかつた、有繋に僕も初のうちは涙もこぼした、我と我身を責めもした、幾度か直ぐ春枝に遇ひに往かうと思ひ立つた。想へば春枝の絶望の様!苦惱の様がありくと眼の前に見える——然し僕は遂に大佐の宅にゆかなかつた、蔭ながら春枝に詫び其許容を求め、頭を下けて自分の不都合を謝した。或日、町で春枝に似た娘の影を見た時は直ぐ踵を轉じて後をも見ず一目散に逃げだし程遠かつて漸と安心した位。

(明日は)といふ言葉が決断ない人と小供とに用ゐらるゝやうに僕も(明日こそ仕つて見よう如何なつて居るか)と言ひながら今日が日まで飯を食ひ能く眠つて来たのである。

其うち僕は春枝を思ふよりも安藤のことを思ふやうになり、遂に亦た往來することゝなつたが、彼は以前と變らず僕をもてなした。そして僕は今更彼の豪いことをしみて感じて来た。見給へ、僕は或は妬み或は悲み或は泣き大騒ぎをやらがして全然道化芝居の一等馬鹿な役を演じたが、安藤は戀の初も中も終も自由、大膽に、至極く單純に至極平和に、微笑しながら歩み去つたではないか、諸君或は(別に驚くに足りない、安藤は一人の娘と戀に陥ちそして戀が醒め、そして女を捨てたといふに過ぎない……何のことだ、誰にでも能くあることだ!)と言ふだらう。至極御尤然し我々の中何人が能く自分の過去と現在とを判然と區別し得るか。言つて見給へ、誰が克く凡俗の非難を少も畏れないうで歩み得るか、自分に戀ひ焦がれて居る女に對しては誰しも至極お人が能くなる者である、我々の中誰が克く此誘惑に負けないで男らしく、自己をも他をも欺かず、自然の示す處に従ひ得るか、實に我々の中何人が能く彼の小けな虚榮心、小けな美感、小けな同情、小けな自省の念に支配されざる程の人格を持つて居るか。……、諸君、此處に人あり彼は自分の心最早や全く戀人の上にあらずと自から認めざるを得ない苦しい時に當つて克く其戀人と別れたとせよ、此男は確か

に彼の薄弱の心、決断のない心からして何時までも怪しい夢を繰返して自分も苦み他をも傷ける弱い男よりか、遙に戀の秘義を解することが深いのである！、安藤こそ則ち其人ではあるまいか！、人生を達観し、若い時の種々な癖を去つて觀察するならば安藤は確に非凡な男と言はなければならぬ。

さうだ、言ふことを忘れて居た、僕は春枝に別れてから三月ばかりの後、途で大佐に遇つた、僕は驚いて逃げ出し遂に大佐に発見しないで済んだが、然し僕は後から（横着者！）と怒鳴られたやうな気がした。

「そして春枝は如何なつた？」と以上の物語を聞いて居た一人が訊ねた。

「知らない」と仁木新之助は答へた。

夜が更けて人々は別れ散じた。（なほり）

## 園遊會

(一)

自分は園遊會が何よりの好物。招待されて謝絶つたことはなし。處が今度、淺田老侯の遺谷の別邸で催はされる園遊會は空前の大仕掛と聞きながら二週間前から風邪の心地で床に就いて居るため、十の七八までは出席出来ないものと諦めて居たのである。

二三日前から無類の好天氣、例の秋高く馬肥ゆとかいふので當日の盛況も思ひやられながら、自分は頗る瘦せが見え、この分では到底出席覺束なしと落膽して障子にうつる花かな秋の夕日影を床の中で眺め、眼ばかりパチつかして居たのである。

處へ妹の國子が入つて来て

「兄上御氣分は。」

「甚だ快くないね。」と言つて少し考へ「死にたくなつた。」

「マア！兄上は眞實に病弱いよ、風邪位で死でどうなりますか。」

「だから風邪で死ぬとは言はないよ、死にたいといふのだよ。」

「マア、如何して。」と首尾よくと妹を驚かした。

「だつて浅田侯の園遊會に出られさうもないもの、此の分じやア。」

「では私だけ出ましよう。兄上はお留守居していらつしやいな。」と妹も左るもの、真面目で言つて横を向いて編物を爲て居る。

二人とも暫く無言。自分は何とか巧妙ことを言つて妹をついてやらうと考へて居ると妹が

「兄上、自分の返事を爲ないのを見て

「兄上！」

「何で御座います。」

「兄上はそんなに園遊會を嗜好ですか。」

「如何いたしまして、大嫌いで御座います。」

「だつて園遊會に行かれないから死にたいとおつしやつたじや有りませんか。」

「最早死ぬことは見合せました。」

「左様で御座いますか、それで私も安心致しました、先刻から心配でくでなりませんでした。」と言ひさま、つと起つて部屋を出て去つた。引きちがへて女中が運ぶ夕の牛乳。池の鴨

鳥が俄に騒ぎ立つて鳴くのは妹が御でも與るのであらう。  
其夜は静に眠り、翌日からは気分大に快くなつたので、明後日は押しても出てやらうと腹では決定しても顔には出さず、間際になつて妹を狼狽かし、舌戦に敗けた敵き打ちと稱り微笑んで居た。

自分に取つて浅田侯は舊藩主である。言ふまでもなく侯は中國の大諸侯其財産の幾百萬なるを知らず、澁谷別邸の如き實に小公園ほどの廣サ、而も其善美の點はとて東京市の公園と稱する不完全な空地とは比べものにならない。自分一家は常に侯爵邸に出入し老侯は殊の外、自分と妹國子とを愛して居られるので今度の園遊會には、假令自分が園遊會を好まぬにしても、是非出席しなければならなかつたのである。況て自分は園遊會が何より嗜好、場所は浅田侯自慢の澁谷別邸といふ次第。少しばかりの病を押す位、自分には當然であつた。

「オヤ兄上お出かけ？」とや、驚いた風。しめたと自分は眞面目な顔で

「あア一寸と出て来る。」

「だつて未だお顔の色が悪う御座いますよ。」

「出て來たら却つて気分が復るだらう。喜助に仕度しろと言つてお呉れ。」

妹は何處までも自分が園遊會に行くとは思つて居ないらしい。

『どうせお出かけになるなら園遊會にいらつしやいな。』

『イヤ行くまい、餘り人ごみに出ることは可くあるまいから。然しお前は如何しても行かないと悪いよ。姫様に悪いから。』

『兄上が行つしやらないと面白くないけれど……。』

『だつて二人とも行かなくちや老侯にも悪いよ。十時からといふんだから最早仕度したら可らう。私のことは病氣と傳へてお呉れ。』

自分は車を飛ばして直ぐと澁谷村へ。

(二)

時は一時間早かつた老侯は山の吾妻屋と聞いて、山に登つて見ると、二十七貫肥満の老人老て盛々健、今しも假山とは言へ老松繁りて眞山を欺く小高い丘の吾妻屋に倚りて、心持よげに庭園の準備の行届けるを打眺めて居らるゝ處である。傍には二三人、家従とお庭師。

『ヤア廣澤、早い喃、先登第一じや。』と自分を見るや、何時も變らぬ寛濶の高聲なり。自分は先づ招待の禮を述べ、次に今日の好天氣を祝すると

『天氣は無類じや、この案排なら大概な無精者も出て來るだらう。時に園子は如何した、來

たか？。』

其處で自分は園子を出抜いたことを語り、老侯にも園子が來た時、未だ自分を見ない風に挨拶し給へといふや、

『ハツハツハツ、……これは面白い、一つ園子を口惜らせて泣してやらう、この節は急に大人びて乃公が調戲つても仲々泣かなくなつたから喃。』

老侯上氣嫌。我策成れり、自分は嬉しくつて堪らない。斯なると感心なことには自分平常の心掛空しからず、全然有宙天になつて了ひ、風邪も何處へやら『さうだ』と更に一策を案出して時こそ來れと待ち受けて居た。

十時を打つや、馬車、人車、掛聲勇ましく來るはく。何にしる招待状を出した數が一枚を越ゆる二百。二百は來ないと見ても千人の客である。貴族、大臣、政事家、實業家、新聞記者、文學者、學者、官吏、軍人の數々、貴婦人令嬢も亦た少からず、一々これを迎へて庭口より直ちに庭園へと通す老侯以下の骨折も尋常ではない。

自分は老侯等の後に隠れて居ると十時を過ぐる三十分頃妹の園子は大めかしにめかしこんで威勢よく乗り込んで來た。老侯は卒直に

『兄上は如何した？』と何所までも知らぬ顔に爲て御座る。自分は人々の蔭からそつと妹の

様子を見て居るとも知らず、國子は最も感慙に

「兄は先日來風邪氣で床に居まして、今日はとうとう參ることが出来ませんで御座います。大發残念がつて居りました。御前へも宜しくといふことで御座います」とさわやかに建立したので、老候

「イヤ其は残念。格別のこともなければ可いが」と、他くまでしらばくいて居らるゝ。

「難有う御座います」と妹はしほらしく摺揆して庭へ廻り四五人の令嬢連に加はつた。

さて是から自分の番だと急いで自分も庭口へ廻り松林の横なるベンチに倚かかつて二三の知人と世間話を爲ながら、心ひそかに妹の仲間がやつて來るのを待つて居た。

庭園に入る前に人々は接待員からプログラムの奇麗に印刷されたるを貰つて居る。これには庭園の略圖まで加へてあるので初めてこの廣大な庭園に足を入れたものも決してまごつく心配はない。どの林の角へゆけばビーヤホールか有る。どの隅へゆけば蕎麥屋が有る、シャンパンは何處、果物は何處、鮎は何處、其他所謂る酒池肉林の何れなりとも人々の好むに従つて受用することの出来るやう、明細に其場處が誌してある。

七八人の令嬢の一组が近づいて來た。思ふに池の畔にゆく積だらう。其中に國子が雜つて居る。

「座澤君見給へ、揃つて居るね、四邊眩さばかりなりだ。イヤ君の令妹も居るせ。」と友の一人が眼をむき出して言ふ。自分は空嘯ぶいて控へて居たが愈々間近く來たので、ベンチから離れ

「イヤ皆さんお揃ひですな。」と軽く禮して美子といふ十七歳ばかりの令嬢に向ひ

「美子さん、兄上も見えましたか。」

「參りました。今其處等に居ましたよ。貴所何時お來になりました。」

「最早先刻來ました。さうですな九時時分でした。」

「オヤ、だつて今國子さんが貴所はお風邪氣で今日はおいでにならないと被仰いましたよ。」と言つて、不思議さうに自分と妹の顔を見比べた。自分は此處ぞと

「さうですか、それは妹が未だ寢ぼけて居るのでしよう。能く顔を見てやつて下さい」と言つて更に妹に向ひ

「國さん、顔も洗はないで白粉をつけちゃア困りますね。」

「オヤさう、私の顔に白粉がついて居て？」と靜かに言つて反對に自分の顔をのぞき「兄上未だ大變お顔の色が悪う御座いますよ、無理を爲さないで早く歸つてお休みなつたが可う御座いましょう。」



「眞實にさうで御座いますね、お大事になさいますし」と今度は雪子嬢が大眞面目で口を  
たので亦もや大敗北。

「難有う御座ります」と情ない聲を出してベンチに腰を下すや、花の雲は静かに動きたして  
谷に下りてしまつた。

自分は口惜くて堪らんけれど如何とも爲かたがない。左右から友が

「如何したのだ、妙な光景だぜ、君、如何したのだ」と問かけた。

「ナニ如何も爲ないよ。」と自分は平気で「どうだ、シャンパンでもやらうか。」

自分は先に立つて向の天幕を目指して歩いた。天幕の上には燃るばかりの檜が枝を囃し  
て居る。二十名ばかりの紳士が其前に群がつて居る。

(三)

さしもに廣い庭が十二時頃になると何方を向て見ても一團又一團の人。酒氣の加はるに  
連て歡笑の聲が處々で高まつて來た。樂隊の奏するマーチは忽ち絶え忽ち起り、煙火は時  
々思ひ出したやうにボン／＼揚る。

餘興が初まるや舞臺の前の大天幕の下には見る間に人山を築かれたが、しかし是れは來賓  
の半數にも足りないので殊に婦人のお慮に過ぎず。酒を吞で氣煽を吐く年若の連中や斯ういふ

塲所に於ても尤もらしい顔付をして實務を談じなければ氣が濟ぬといふ老紳士どもは相變ら  
ず組を作つて談笑して居る。  
自分は病後だけに稍々疲勞を覺えたので仲間から外れて木陰に休んで居ると、戸塚といふ  
新聞記者が其ひよりのりとした身體を妙に振りながら前を通つて行く。自分は度々この男には  
出遇つたことがあるので

「戸塚君、戸塚君。」と呼び止めた。

「ヤア廣澤君か、如何しました。少し凹んだといふ形ですな。」

「さうだ少々凹んでるのだ。まア此處へ來てお話をささい。」

戸塚は其五尺七寸五分なる長い身體を芝生の上にごうり。

「イヤ實は僕も少々ばかりシャンパンに足を取られた形です。」

「君のやうな大兵の癖に食堂も開かない中から左う凹んじやア困るね。」

「園遊會へ來ると僕は何時でも是れ。眞實の御馳走は食はないで歸へるのです。」

「其代り鮎は食ふこと五十二。」

「ハツハツ、ハツハツ、まゝか。」

「時に面白い種がありましたか。」

「斯ういふ場所には種が有りさうで無いものですよ、つまり畑を見て置くに過ぎませんナ。畑とは種の有りさうな人を見て置くだけです。」

「これは驚いた。さうすると君は其畑なるものを見立て置くといふのですね。」

「さうです。」

「さうすると君等の方の畑にもやはり肥えたのと瘦せたのと自から分れて居るのですか。」

「さうですとも。無論です。」

「僕なんぞ瘦せて居て始末にならんでしょう。」

「ところが大違いです。君は餘り肥え過ぎてます。肥え過ぎて居るのも困りますな。葉ばかり大きくて収穫は却て少いから。」

「これは驚いた、何故僕は肥え過ぎて居るだらう、こんなに瘦せて居るのに。」

腕をまくつて見せた、戸塚は見向も爲ないで

「君のやうな方は色々のことを喋ります。さも仔細らしく議論まで爲て僕等に聞かします。そして結極餘り種になりさうなことを言はないのです。畑てれば煽動に乗るやうな顔をして見せるし。此方が十言いへば二十言で返すし、議論を吹きかければ議論で答へるし、嘲ければ嘲けり返すし、酒を飲ばば倍に愉快に飲むし、新聞記者の對手として申分はないのです。け

れども遂に僕等を空手で返すのは君のやうな人なのです。」と述立て、微笑を洩らした。

「さうすると僕のやうなのは頗る質が悪いのだね。君等の鼻つまみだね。」

「決してさうで無い。君の如きは最も愉快なんで、収穫の有無にかゝはらず、吾等の敬愛する處です。」

「いや之は難有い、さう褒められては黙つて居られない。彼の店へ行つて君の爲めに一杯健康を祝しましょう。」

「大賛成！」と戸塚は起上つた。二人は二歩三歩行くと、一人の軍人、年齢は四十前後大佐の禮服を着たのが、眞赤な顔をして昂然とやつて來るのに遇つた。

「大將！ではない大佐。如何です、お顔の色が大分可いやうですな。」と戸塚は少し嘲ける氣味で呼びかけた。すると軍人、嚴格な顔を速製して戸塚の顔を見たが黙禮して行き過ぎて了つた。

「何人だね、餘り見かけない軍人だが。」と自分は訊ねた。

「森川虎五郎と云ふ先生です。僕も二度ばかり遇ただけです。」

「どうです、あゝ言ふ畑は肥えて居さうだね。」

「なかく以て。」

「瘦地かね？」

「決して〜。」

「僕等の仲間だらうか。」

「如何して。あれは巖です。」

「ハッハッ、、、齒も立たない代物かね。」

「さうですな。例へて言へば海中の孤巖ですな。僕等は鳥です。翼を休めるために棲ることもあります。そして其頭に糞を爲てやるから、まんざら捨たものでもない。」

「さうすると君は信天翁だ。」

「馬鹿言つちや不可ない。ハッハッ、、、信天翁は面白い！可愛がり給へ、罪のない鳥だ！」

二人は天幕に入つて葡萄酒の杯をあげ、自分は心から戸塚の健康を祝して、さて傍を見ると、木陰の圓卓を圍んで七八人の洋服紳士、中には田舎出と見ゆるも雜つて頻りと放言大笑して居る。今しも小太川といふハイカラ紳士が古めかしい倫敦通を振り廻して居る真最中らしい。雑返して居るもの、謹聴して居る者、一人は居眠つて居る。

「先づ日曜には公園にゆくのですな。月曜には町を見物する。火曜日にはウエストミンスター

ーアツベイとかセントポール寺とかを見物するのです。それから水曜日にはナショナルギャラリー……。」

「ギャラリーとは。」と一人の男が眞面目で聞く。

「畫堂です。たいした者が有りますせ。二十二室に分つて美術の粹をあつめてあります。有名なるターナーは最後の一室を獨占して居ますが、ターナーの風景畫を見ると日本の畫など全然見られませんな。室の左方の壁には一見、壯重沈鬱の畫が並んでいます、これはターナー初期の畫で一口に言ふと自然の外形を描いたものです。右方の壁は光り煌やいた畫ばかり、これはターナー後年の作で、所謂空氣を畫いたものです。」とのべつに饒舌る鼻先を

「僕だつて空氣なら畫けら」と一人の男が雜返を入る。

「さうサ白紙にガラス板を張つて畫様を着ければ空氣の畫だ。」と一人が合槌を打つ。小太川躍起になつて

「無益だ、君等に美術の話をして無益だ。豚に眞珠を投ずる如しだ。」

「相成るべくは有名なるターナーよりか、有名なる倫敦のピフテキを投じて貰ひたいものだ。」

「さうだ君等には食物の談話の方が可いだらう。牡蠣のことを話さうか。」と何處までも罪の

ないハイカラ先生。

『西洋にも牡蠣が有りますか。』と眞剣に問ふ人もあるので世は持たものなり。

『有りますとも。大ありでさア。而も日本のよりか幾干美味いか知れん。オイスターシヨツプと言つて牡蠣ばかり食はす店が澤山あります、芝居小屋の傍など最も此店が多い。代價も其代り馬鹿に高いね……』とこれから日本人の蠅の失敗談に入らうとする處を、聞き飽きたといふ顔色で一人の男

『けれども君、品川の牡蠣を食つたことが有りますか。』

『食ひましたとも。』と小太川は正直に言ひかへす。

『何處で食ひました。』

『賣りに來たのを買ひました。』

『だから話せない。日本にだつてオイスターシヨツプがありますよ、品川にあります。朝日の昇るのを見ながら酢牡蠣で一杯傾むける心地つたら有りませぬ。』

『ハハハ、馬鹿を言つてる！』と戸塚が大聲を上げたので、彼の一組は一度に此方に向いた。二三人知つた顔もあつたが、互に黙禮したまゝ、近らず、我等は直ぐ天幕を出てぶらぶら歩くさだした。

『小太川の畑は如何だね。』

『あれは肥えたり、瘦せたり。』

『時と場合で違ふといふ代物だね。』

『得意の時は肥え、失意の時は瘦せ、得意の時は間はないでも種を下し、失意の時は出さうにも種を持って居ませぬね。』

二人はぶらぶらと池の畔に出た。すると岸に臨んで建てた蕎麥屋の中で何人が可笑な調で義太夫を唸つて居る。

『僅なれ共、志、此銀を路銀にして、早う國へいにや、必々煩ふてばしたもんなと、銀を渡せば押し戻し、嬉しうござんすれど、銀は小判といふ物をたんと持っております、そんなりやもうさんじます、忝うござりますと、なく立を引とめ、夫はさうでも是はわしが志と、無理に持して塵打ち拂ひ——』

『ヨウ！ヨウ！』と戸塚は外から掛聲をして行き過ぎる。

『驚いた向を見たまへ。そら橋の傍の仲間を。英雄が揃つて居る。』と戸塚の示す方を見ると、成程豪傑の手合七八人。

『廣澤君は人物論が嗜好ですか。』

『嫌でも有りません。』

『處が其處の連中となると人物論で持切だから恐れる。古今東西の人物を品評して、掌を指さすが如しですからね。人物論の一つも爲ないものは語るに足ぬと心得てるから面白い。見給へ必定やつて居るから。』

果て然り——、五紋の三十七八の大男、威猛高になつて。

『曹操を奸雄だとか何とか言ふが要するにニイツエの所謂超人だ！』

自分は思はず吹き出した、曹操とニーツエ、餘り其取合せが可笑いので流石に大男其人も可笑かつたか少し笑を含んで

『全く超人だ、奸雄もくそも有つたものか見給へ能く豪傑の士を得てこれを自在に用ゐた手腕を。荀攸が袁紹を去つて操に投するや、操は何と言つた「吾が子房なり」荀攸を得ては、公達は常人にあらざるなり、吾之れと與に事を計るを得ば當に何をか憂ふべけん。郭嘉を得ては曰く「孤をして大業を成せしむるもの必ず此人ならん。」如何だね、愉快じやないか。僕は嘘にでも斯う言はれ、ば其人の爲に身を擲つね。支那の文人どもは内々曹操の大英雄なることを知りながらも必定難辯をつけたがるから癪だ。』

氣焰當る可からずとは此事、二人はそこへ立去り、直ぐ山に登つた。

やはり此處にも五六人の一組吾妻屋に入つて居る。見れば自分の知つた文學者が一名、教授の理學博士が一名、それに一人の僧侶が雜つて居る。さすがに達も其中に加はつた。談話の題目は禪、旅行、俳諧、小説、天文などの賑ふ如く軽く移つてゆく。僧侶が理學博士に向つて

『若し山中で虎に遇ひ、逃路が無かつたら如何なさる。』

理學博士は眞面目な顔で考がへて居たが

『さうですな。それは猛虎ですか病氣の虎ですか。』と問ふた。

『勿論猛虎です、所謂金毛白面の虎です。』

僕は岩陰に隠れます。』

『めついたら如何なさる。』

『なるべく見出されぬやうに小さいさくなつて息を凝らして居ます。』

『如何しても見出かつて、虎が齒をむき出して來たら。』

『そいつは困りますな。逃げられるまで逃げます。』

『逃げられなかつたら如何なさる。』

『困りましたな。仕方がないから敵んでも對つて見ます。』

『そいつは不可ん。それでは食はれて丁います。殺されます。』  
『是非に及ません。』

『禪の奥義が其處にあるのです。若し今言つたやうな場合には此方も虎になるのです。』と禪僧は得意の眉をあげた。博士は何處までも眞面目で

『如何して人間が虎になれますか。』

『そこが禪です、自分を虎だと観念して四逞になつて、虎を睨み返すのです。さうすると虎の神が此方に移り眞實の虎が畏縮します。則ち猛虎に當るに猛虎の威を以てするのです。』  
『つまり虎の眞似をするんですな。』

『どうです。』

『失禮ですが貴僧のお顔なら虎と見えるかも知れませんが、僕の顔は少し長過ぎるから無益でしよう。』と言つて博士は其清かな温順な顔をつるりと撫でたのを見て、今まで可笑さを忍んで聞いて居た連中が一度に吹出し、禪の談話も立消えさうにした時、突然山の下で先の衆徒連が何に激してか大聲を上げて喚呼きだした。見下すと直ぐ下で

『君は君の好む所の人物を崇拜しろ、僕は僕の好む處に従う。お互の自由だ』と一人がいふ。  
『宜しい、それなら何故ガルバルジを攻撃する。ガルバルジを攻撃するのは僕を攻撃す

るやうなものだ失敬だ。』

『君はそんならガルバルジか。』

『勿論僕はガルバルジだ!』

と言ふや、山の上の自分等は思はず笑ひかけると、禪僧大眞面目で

『今言つた人は今の今、ガルバルジに爲つて居るのです。決して笑ひごとじやありません。虎の神に合すれば虎となり、英雄の神に合すれば英雄となる。不思議はないのです。』と説つけた。

けれども氣の毒のことには、忽ち響く食堂へ案内の鐘! 下の衆徒連は一度に聲をひそめ、ガルバルジも曹操も相擁して食堂の方へ操込んだ。これより鳥肉、獸肉、魚肉の神に合して鳥となり獸となり魚となるべく吾々も山を下りて、芝生に建て建てある大天幕の食堂に入つた。

園遊會の食堂が靜肅であつた例を自分は知らない。天長節の夜會ですらナイフとフォークの戦闘だから、況て園遊會をやと思へども、自分は何時ながら不快の威を催うのである。彼處に曹操の智を以て他の折角運び來つた一皿を奪ふあれば、此方にガルバルジの勇を奮つて豚の丸焼を一人で占領せんと眞赤になる紳士あり。シャンパンで杯を洗ひ半分飲んで餘

を捨るほどの男が如何して食堂に入ると斯うも醜體を演じて一片の肉を争さうだらう。

自分は避易して一隅に立つて居ると、戸塚が何時の間にか大皿に山ほど積で来て

「廣澤君、來給へ、來給へ！」と先に立つて食堂を出るから自分も續いて外に出る。

「禪僧の教を奉じ猛虎の氣合で、ウンと取つて來ました。二人でも食ひきれまい。」と戸塚は木陰の圓卓に座を占めた。

「待ち給へ、それじや僕が飲料を取つて來るから。」と自分は食堂に引返へし、給使に命じて葡萄酒二本を得て歸つた。

二人は且つ飲み且つ食ひ談話を續けた。

「貴婦人令嬢の姿が見えないが如何したのだらう。」と戸塚はきよろ／＼する。

「婦人の食堂は別になつて居るから見えないのだ。」

「成程さうか。猛虎の群に婦人を投ずるは我淺田侯の爲さる處だ！時に令妹も今日は見え

て居ますとも。」とそれから自分は二三日前からのことを話し、今日の敗北を白狀に及ぶ

や、  
「いや其は近頃の珍話です。家兄顔色なしといふ處だが、實は男子一同の面白に關するから

僕が是非敵を打ちましよう。」

「宜しい！今少し待ち給へ、食堂から出て來るから、彼の森蔭に待受けて僕も今一戦試みる。」

「助太刀には僕が出ます！高が女でサ、舌頭の戦なう憚りながら戸塚相摸守、多年の手練を以て一撃の下に國子さんを破つて見せます。」と先生シャンパンの酔未だ醒めざるに更に赤酒の酔を加へて來たので大氣燦なり。

皿も罎も首尾よく平らげて了ひ、時を見計らつて起上がり、婦人食堂に近き林の横なる休憩所に入つて國子の出て來るのを今や遅しと待ち受けて居た。

暫時すると、四五人の貴婦人天幕の外に現はれ、引續いて一組、一組、現はれて來る。

「そら來た！」

「どれです、どれです。」

「見給へ、そら七八人の年若い一組が此方へ向いて來るだらう。あの右に立て、ハンケチを隠して目を避けて居るのが妹です。」

「さうです、さうです占めた！」

「待ち給へ、今僕が招くから」と休憩所の前に立つて自分は手を舉て其一組を招いた。一同

の視線が此方に来るや、國子と他の二三人が何事か呟いた。そして皆々笑味を含んで誰かに近づいて来る。

『しかし悠然として押しかけられては驚くな。此奴は恐縮だ』と戸塚摸相、今更首を縮めて頭を撫て居る。

『オイ、毅然し給へ。戦は勇氣にありだ。』

言つてる中に間近う来た。自分は

『我が敬愛する諸子！どうですお休憩になつちやア。國ちやん、お入りよ、紹介する紳士があるから。』

令嬢達は多勢を頼んで最と應揚に座に着いた。長方形の卓は二人の男子、八人の女子で占領せられて了つた。

『國ちやん此方は東洋新聞の政治部主任、戸塚君です。』と、更に戸塚に向ひ『この女は僕を病氣と偽はつた曲者、妹の國子です。宜しく。』と自分はやつてのけた、

『イヤこれは初てお目にかゝります。僕は戸塚相模です。相模守大船です。何分よろしく』とやつてのけた。

『宜しく』と國子は言つたばかり、微笑を含んで控へて居る。

『廣澤君は先達から御病氣だつたさうですが、然し全快して結構です。』

『兄は病弱いものですから、少しの風邪にも大騒を致します。今日も出られないとか申して居ましたが、私が無理に連れて参りました。兄上大分お顔の色がよくなりましたよ。ほほ、ほほ……。』

『眞實に廣澤君、先刻お見受申したよりも大變お顔の色がよくなりましたよ。』と雪子嬢の助太刀。

『久しぶりで御自慢の詩吟を聞かして頂戴な』と美子嬢の横槍。

斯うなつてはやぶれかぶれ、自分は

『宜う御座います。詩吟でも何でもやりましょう。先づお得意の唱歌から願ひましょう。』

『戸塚さんは兄と異つて必定何でもお出来になるでしょう。兄の詩吟も聞きあきましたから戸塚さんのお得意をお願い致します。』と國子は正面より一本。戸塚はとつかはと。

『イヤ是は恐れ入りました。僕の無風流は廣澤君がよく御存知です。どうでしょう、皆さんの唱歌を願ひたいものです。』

『雪子さん御一同に歌ひましょう。』と國子は先づ椅子を起つた。雪子嬢も續いて立ち『秋の空晴れて』といふ唱歌を歌ひだした。聲も態度も申分なき出来。歌の半に至り、美子嬢、富



子嬢、女子嬢續いて起ち上り合唱の節面白く歌ひ終つて席に着いた。

『いづれ又お眼にかゝります。』と國子は戸塚に挨拶し、しとやかに禮をして先に立ち天幕を出たので、令嬢達も續いて起ち、静々と彼方へ歩み去つた。

二人は茫然と其後を見送つて居たが、スドンと揚る煙火の音をきつかけに戸塚は可笑な身振をして

『チエーツ残念じやない』（をばり）

壽  
告  
聲  
終

明治四十年五月十一日印刷

明治四十年六月十四日發行

附  
贈  
正  
價  
金  
八  
拾  
錢

著 者 國 木 田 獨 步

發 行 者 岡 三 郎  
東京市神田區表神保町貳番地

印 刷 人 吉 見 繁 藏  
東京市小石川區久堅町百八番地

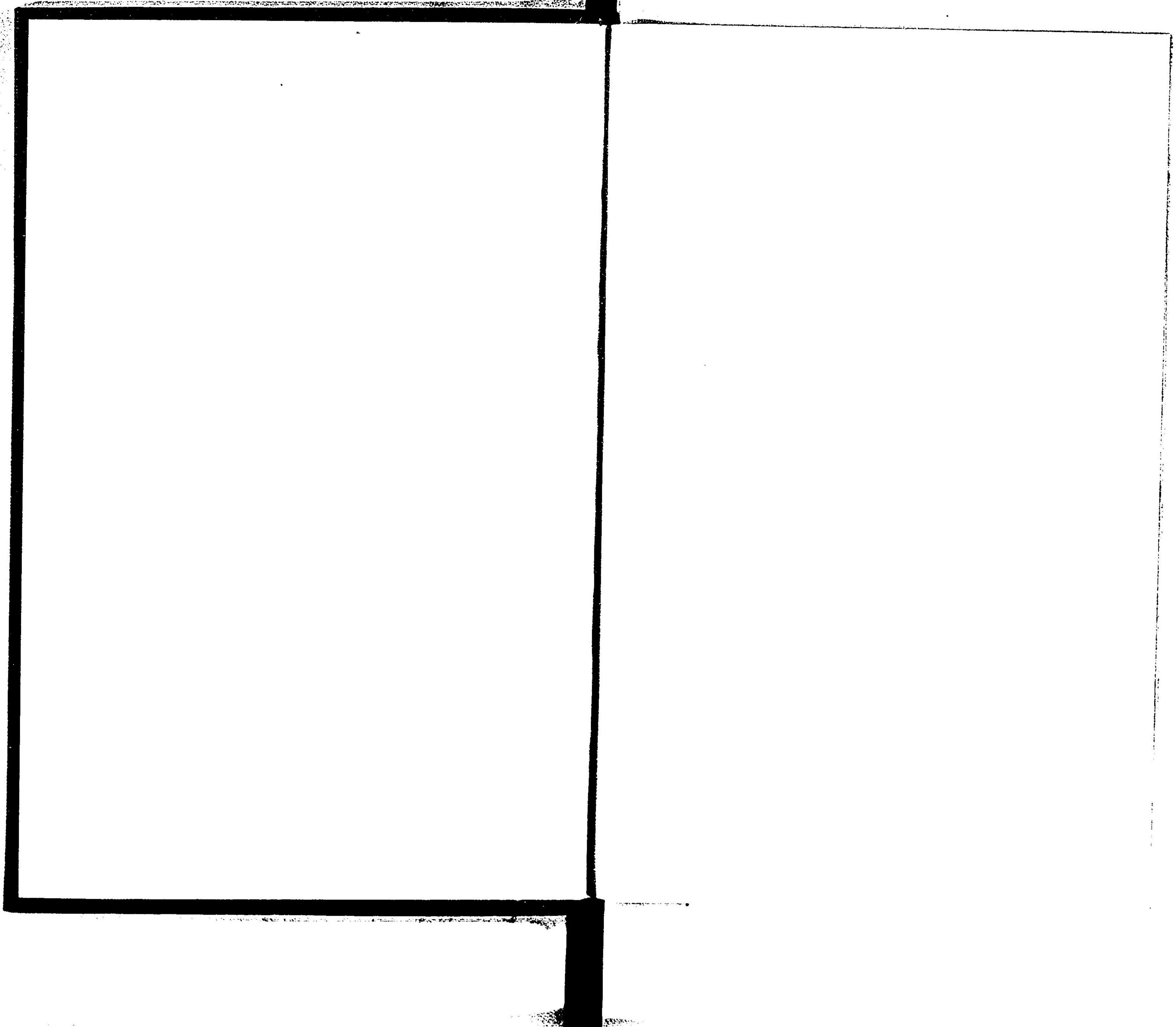
印 刷 所 博文館印刷所  
東京市小石川區久堅町百八番地

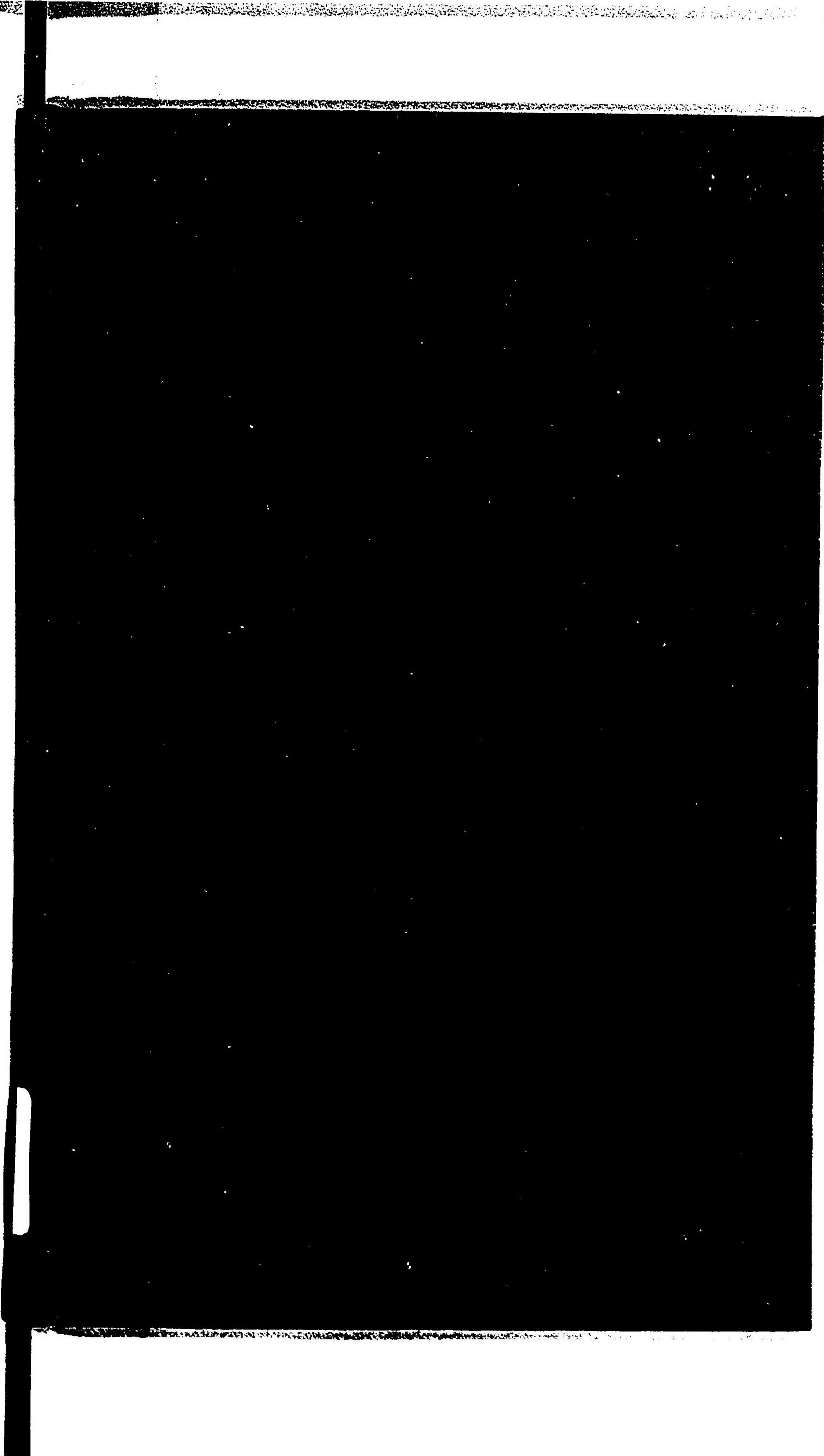
東京市神田區表神保町貳番地

發 行 所 振替口座四一〇五番  
電話本局一六一八番 彩 雲 閣

不 許  
複 製

4-11-10





26

398

094644-000-5

26-398

涛声

国木田 独步/著

M40

DBQ-2166



